

東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩

No.43

特集 博物館のウィズコロナ・アフターコロナ



令和4年3月末で閉館する集合住宅歴史館（集合住宅歴史展示棟）外観

2022.3

東京都三多摩公立博物館協議会

目次

【特集】博物館のウィズコロナ・アフターコロナ

●コロナ禍で問われた、美術館で「絵を見る」ということ	(公財) たましん地域文化財団	… 2
●日本獣医生命科学大学附属ワイルドライフ・ミュージアムの 2021 年	日本獣医生命科学大学附属ワイルドライフ・ミュージアム	… 3
●コロナ禍での取り組み	国立ハンセン病資料館	… 4
●ウィズコロナ時代の教育普及事業	武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館	… 5
●コロナ禍での資料館・古民家園運営(令和3年度活動状況)	立川市歴史民俗資料館	… 6
●令和3年度 活動報告	武蔵村山市立歴史民俗資料館	… 7
●コロナ禍の帝京大学総合博物館—人工衛星から絵画鑑賞・学校史まで—	帝京大学総合博物館	… 8
●ウィズコロナ、アフターコロナに向けて	江戸東京たてもの園	… 9
●臨時閉館 21 ヶ月の舞台裏	国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館	… 10
●博物館のウィズコロナ・アフターコロナ	小金井市文化財センター	… 11
●令和3年度活動報告	東京都立大学91年館	… 12
●ウィズコロナと五日市郷土館の記録	五日市郷土館	… 13
●町田市立自由民権資料館 コロナ禍での活動	町田市立自由民権資料館	… 14
●福生市郷土資料室における令和3年度の活動	福生市郷土資料室	… 15
●令和3年度活動報告～コロナ禍の試み～	調布市郷土博物館	… 16
●コロナ禍での令和3年度活動と情報発信	瑞穂町郷土資料館けやき館	… 17
●コロナ禍における新たな博物館活動～令和3年度活動報告～	清瀬市郷土博物館	… 18
●コロナ禍の状況と課題	檜原村郷土資料館	… 19
●コロナ禍の日野市郷土資料館	日野市郷土資料館	… 20
●コロナ禍でのボランティアの活動とこれから	多摩六都科学館	… 21
●640日の臨時休館と博物館再開	東京農工大学科学博物館	… 22
●コロナ禍における「くらやみ祭」出前・オンライン授業	府中市郷土の森博物館	… 23
●続・休館と新型コロナウイルス	パルテノン多摩	… 24
●コロナ禍における活動	東京都立埋蔵文化財調査センター	… 25
●気持ちを新たに再スタート	奥多摩水と緑のふれあい館	… 26
●旧日立航空機株式会社変電所の公開開始について	東大和市立郷土博物館	… 27
●集合住宅歴史館のウィズコロナと移転計画	集合住宅歴史館(U R 都市機構)	… 28
●2021年度の活動を振り返って	くにたち郷土文化館	… 29
●2021年度の活動について	町田市民文学館ことばらんど	… 30
●博物館の役割を果たしていくために	羽村市郷土博物館	… 31
●科学館のウィズコロナ	コニカミノルタサイエンスドーム(八王子市こども科学館)	… 32
●古民家園のコロナ対応	狛江市立古民家園(むいから民家園)	… 33
●新型コロナウイルス感染症対策と博物館事業	東村山ふるさと歴史館	… 34
●青梅市郷土博物館 コロナ禍での令和3年度の取り組み	青梅市郷土博物館	… 35
●桑都日本遺産センター 八王子博物館のコロナ禍における開館	八王子市郷土資料館	… 36
●鈴木遺跡資料館のウィズコロナ・アフターコロナ	小平市鈴木遺跡資料館	… 37
●コロナ禍での工夫と試行錯誤	日野市立新選組のふるさと歴史館	… 38
東京都三多摩公立博物館協議会会員名簿		… 39

※各館からの報告は、2021年12月下旬に東京都三多摩公立博物館協議会加盟館より原稿を集め、まとめたものです。

コロナ禍で問われた、美術館で「絵を見る」ということ

(公財) たましん地域文化財団 齊藤 全人

はじめに

今回のコロナ禍は、程度の差こそあれ打撃を受けなかった業界は一つもないと言えるほど、長期にわたり私たちの生活に暗い影を落としました。それは今もなお続き、その傷が完全に癒えるまでにはさらに数十年単位の年月が必要になることは間違いありません。そして、コロナ禍に見舞われたという意味では、美術館も例外ではありませんでした。「ステイホーム」そして「不要不急」という言葉が叫ばれた時、これまで当然と思われていた文化・芸術活動の必要性が大きく揺らぎました。言い換えれば、この2年間は私たち学芸員にとっても、美術館の存在意義を再確認するための貴重な時間となったのです。

美術館の感染症対策

たましん地域文化財団が運営する美術館は2つあります。国立市で1987年より開館しているたましん歴史・美術館と、立川市に2020年6月に新たに開館したたましん美術館です。

たましん美術館は当初5月からの開館を予定していましたが、新型コロナウイルスの感染拡大が日本でも深刻化し緊急事態宣言が発出されたため、やむを得ず開館を宣言解除まで延期するという苦しい船出となりました。

まず、2つの美術館で行った感染症対策をまとめておきます。

- ・展示室への入館者数の制限
- ・団体鑑賞の受け入れ停止
- ・入館時の検温、手指の消毒とマスク着用をお願い
- ・イベントの中止
- ・学芸員によるギャラリートークの中止

この中で、イベントに関しては、新しく開館したたましん美術館をたくさんの方に知ってもらうために、多摩地域のいくつかの美術館の館長にご講演をいただく大々的な催しを企画していたため、その中止を余儀なくされたことが残念でなりません。また形を変えて、いつか実現したいと考えております。

美術館のデジタルシフトという流れに対して

このコロナ禍で顕著だったのが、美術館・博物館のデジタルシフト関連の取り組みでしょう。文化庁による感染拡大予防のための補助金制度も後押しとなって、チケットをオンラインで購入できるシステムの構築や、デジタルコンテンツを配信するためのプラットフォーム整備などの動きが目立ちました。

少し話が変わりますが、たましん地域文化財団は、歴史資料室と美術資料室の二本柱で活動をしています。歴史資料室はその名の通り、多摩の歴史資料を重点的に収集し、公開しています。歴史資料室はこの機会にデジタルアーカイブの充実をはかり、積極的にデジタル化を推進しました。その取り組みに関しては『ミュージアム多摩』第42号をご参照ください。

一方の美術資料室は、たましん美術館とたましん歴史・美術館の両館において、様々な企画展を行うのが主な活動です。こちらは歴史資料室と比較して、積極的にデジタル化を進めたとは言えません。美術館のWEBサイトで開催中の展覧会情報を見ることはできますが、例えばバーチャル展示室で鑑賞体験できる

ような仕組みもなければ、所蔵品を間近に見るよりはるかに細かく観察できる高精細画像を提供しているわけでもありません。

もちろん人的・予算的な制約も理由の一つではありますが、決してそれだけではありません。このような時代だからこそ、あえて美術館で絵を見るという体験を来館者に提供することを第一優先と考えたのです。

絵を見るということは、絵と対峙するということです。何が描かれているかを知るだけなら、印刷物で見ても、パソコンで見ても、スマートフォンで見ても、大差はありません。しかし、展示室の中で絵の前に立つということは、決してそれだけではないはずです。平面的な絵であっても、照明によって絵具のわずかな凹凸には陰影が生じ、物質としての確かな存在感を主張します。隣り合って飾られた絵は、互いに響きあいながら、それぞれの個性を際立たせます。同じ絵をまたどこかで見る機会はあるかもしれませんが、その展示構成で見ることができるのはその時限りの一期一会です。そしてじっくりと展示室を巡って美術館を出た後には、目にうつる外の世界の色合いが変わっているように感じられることすらあります。これが美術館で絵を見るという素晴らしさです。スマホで手軽に展覧会の様子が見られることが、この鑑賞体験の機会を奪っている面もあるのです。

デジタル化はもちろん重要です。それによって、美術館に足を運ぶことができない人にも情報を届けることができるのですから。やるかやらないかで言えば、当然やるべきですし、当館も今後少しずつオンラインで提供できるコンテンツを充実していく必要はあるでしょう。ただしデジタルシフトできるものできないものがあり、プラスの面だけに目を向けるのではなくデジタル化することで漏れ落ちるものもあるのだ、ということは、学芸員であればきちんと認識した上で、その取捨選択をすべきだと考えています。

最後に

「ウィズコロナ」「アフターコロナ」はお題目のように唱えていけば自然と達成できるものではありません。待っていれば誰かが「今日でコロナ禍は終わりです」と宣言してくれるわけでもありません。私達一人一人が、日々の暮らしを取り戻す明確な意志をもたなければ、この騒動は終息しないでしょう。歴史の中で幾度も発生し、その後根絶されることなく現在も共存している数多のウイルスと同様に、新型コロナウイルスに関しても最低限のリスクを許容してある意味で忘れる努力をすること、そして文化・芸術を不要なものではなく、人間らしい生活にとって欠かせない営みだと認識することが日常を取り戻す一歩となるのです。

2020年5月末に緊急事態宣言が解除されて、ようやく開館したたましん美術館。そこに訪れて下さったあるお客様の言葉が忘れられません。「絵を見るのがこんなにうれしいと感じたのは初めてです。私にとって文化は不要不急のものなんかじゃないって、はっきり分かりました」。

日本獣医生命科学大学付属ワイルドライフ・ミュージアムの2021年

日本獣医生命科学大学付属ワイルドライフ・ミュージアム 石井 奈穂美

当館の基本情報

当館は2015年に日本獣医生命科学大学内に設置された大学付属博物館です。館内には、主に大学史についての展示を行う歴史系展示室と、日本の里山に暮らす野生動物についての展示を行う自然系展示室があります。当館が展示室として活用している本学一号棟は、2020年4月に「旧東京市麻布区役所庁舎（日本獣医生命科学大学一号棟）」として国の登録有形文化財（建造物）に指定されました。一号棟の耐震化や基礎の補強、周辺環境の整備のための工事により、2020年4月から長期休館を続けています。

コロナ禍での活動①：展示

工事の都合により展示室を使うことができないため、本学E棟のエントランスホールにガラスケースを設置し、ミニ展示コーナーとして活用しました。2021年度に実施した展示は下記のとおりです。

- ・展示① 博物館の紹介・日本獣医生命科学大学のあゆみ・麻布区役所と一号棟
(展示期間：2020年9月1日～2021年5月14日)
※展示期間中に展示内容を一部変更
- ・展示② 野鳥のヒナに会ったら
(展示期間：2021年5月15日～2021年10月22日)
- ・展示③ 2021年度上半期 博物館が集めた資料たち
(展示期間：2021年10月23日～)

COVID-19の感染拡大に対する大学全体の方針としてキャンパスへの入構制限が続き、一般公開が困難であったことから、新入生向けの大学史の紹介（展示①）や、動物に興味を持つ学生の多い本学ならではの展示（展示②）、学内の別の部署から移管された資料の紹介（展示③）など、本学の学生と教職員をメインターゲットとして展示のテーマを選択しました。



ミニ展示コーナーの一部



展示②で陳列したオナガの巣

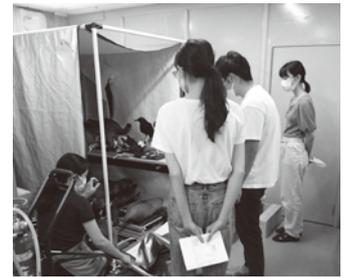
コロナ禍での活動②：学芸員課程教育

当館は本学で学芸員課程を受講する学生の学内実習の場としての役割も担っています。昨年度から引き続き、E棟のミニ展示コーナーを活用して、4年生の受講生20名が4つの班に別れて展示を実施しました。また、学芸員課



受講者による展示

程を担当する教職員との協議を重ね、8月から9月にかけて、3・4年生の受講生を対象に、昨年度は実施できなかった見学実習を実施しました。見学実習では、1回あたりの参加人数の上限を5名とするなどの感染対策を取り、工事期間中に博物館が使用している仮設保管室を見学した上で、仮設保管室における資料管理を体験してもらいました。



見学実習の様子

コロナ禍での活動③：資料収集

2021年7月から、学内にある資料の移管活動を本格始動しました。学内の関係者に向け資料の移管を希望する書面と博物館が収集している資料の一覧を送付したところ、廃棄予定としていた資料の移管について相談を受けることが増え、2021年の4月から9月までの間に、実験器具や古い冊子などの移管資料30点を含む44点の資料を収集することができました。また、感染状況を見ながらの実施ではありますが、すでに退官された教員を対象に、古い機材や大学の歴史についてのヒアリングも実施しました。

コロナ禍での活動④：学内の取材

昨年に引き続き、学内ではオンラインでの授業の実施やイベントの中止・形式変更が余儀なくされています。博物館では学内の変化がわかる場面の写真を撮影し、記録を残しています。



写真撮影の時間制限を示す入学式の看板



飛沫対策のボードが置かれたオープンキャンパス会場

今後の予定

2020年4月から工事の都合による休館を続けていましたが、2021年12月末には建物の工事が終了し、資料の移動と展示の準備期間を経て、2022年の夏には展示を再開する予定です。一般公開の再開に関しては、大学としてのCOVID-19に対する行動指針に従う必要がありますが、予約制での見学の受け入れなど、可能な範囲での公開を検討したいと考えています。※本原稿は2021年12月時点の情報をまとめたものです。



公式
Web サイト



公式
Facebook

コロナ禍での取り組み

国立ハンセン病資料館 管理部広報担当 及川 由紀子

当資料館では、昨年度より新型コロナウイルス感染拡大防止対策の一環で、事前予約制・定員制による開館とし、スムーズな事前予約が可能となるよう、公式ホームページ内に予約システムを立ち上げ対応してきました。そして、新規感染者数が落ち着いた状況に合わせ、2021年11月13日より、個人のお客様に関しては、通常開館に戻し営業をしております。

団体のお客様に関しては、団体プログラムを11月13日より再開いたしました。3密回避を目的に、当面の間30名様を上限に、団体の予約を受け付けております。

通常開館に戻した後も、引き続き新型コロナウイルス感染拡大防止対策として、限定開館時と同様に、館内の消毒作業の徹底を行っており、また入館されるお客様においてはマスクの着用、検温、手指の消毒、ならびに来館者票記載時使用した鉛筆のお持ち帰りや、証言映像コーナーにおける使い捨てイヤホンの使用などの対応は継続して行っております。

コロナ禍において、急速に進んだことのひとつが事業のオンライン化です。事前予約制・定員制としたことで、来館ができなくなった団体のお客様向けの対応として、10名以上の団体のお客様を対象に、オンライン団体見学プログラムを開始いたしました。具体的にはZoomなどのソフトを活用し、常設展示室からライブ配信を行うもので、ハンセン病問題に関するガイド映像の視聴ならびに語り部映像の視聴から、学芸員が3つの常設展示室を回りながらハンセン病の歴史やハンセン病問題の説明を行うオンライン展示解説を提供する内容です。また、オンラインライブ配信ならではの質疑応答セッションを組み込むことで、多くの学校の授業においてご利用いただいております。なお、常設展示室よりライブ配信ができるよう、インターネット環境の整備を行いました。

また、オンライン事業は常設展示室におけるオンライン展示解説に加えて、学芸員がハンセン病問題に関わるテーマを話す「オンラインミュージアムトーク」をシリーズで企画し、Zoomを活用し配信しております。今年度の開催内容は下記の通りとなっており、各回ともご好評をいただいております。

【今年度のオンラインミュージアムトーク】

4月24日：歴史の継承～長島愛生園歴史館の取り組み～

6月19日：機関紙『高原』のあゆみ

7月17日：戦後ハンセン病療養所における短歌

9月25日：「教えられる」場から「考える」場へ

10月23日：神山復生病院の歩み

11月27日：国立ハンセン病資料館収蔵庫ツアー・資料館の現場から

12月18日：隔離のなかの食

2月19日：美粧院を立ち上げた愛楽園の婦人会

3月26日：図書室からの招待状～頁をめくり、想いを辿る～

また、当資料館公式YouTubeチャンネルを活かし、SNSにおける発信にも注力しております。「オンラインミュージアムトーク」をアーカイブ化し、かつアフタートークセッションを



オンライン展示解説

YouTube用に加えて掲載することで、ライブ配信をご覧いただいた方にも楽しめる内容をめざしております。また、ハンセン病問題の啓発活動の一環で、外部講師を招いたオンライン講演会を企画し、YouTubeにおいてライブ配信を行っております。

【今年度のオンライン講演会】

8月21日：渋沢栄一の生涯とハンセン病—その事績と功罪をめぐって—

9月11日：ハンセン病療養所から考える芸術の意味

12月11日：「ハンセン病と人権」セミナー

また、これまで学芸員を講師として無料で派遣し、学校・企業・団体などにおいて行ってきた講演啓発活動においても、コロナ禍によりオンライン化が加速しました。

各種事業のオンライン化によるメリットは、これまで関わりの薄かった、新たな層のお客様にご利用いただけるようになった点です。団体向けオンライン展示解説は、遠方のため当資料館へお越しいただくことが難しかった団体の参加を可能にしました。また、天候や交通機関の影響を気にせず開催できるため、多くの幅広い客層にアプローチすることができています。今後ますます新たなお客様へのアプローチ拡大が目指していけるのではないかと期待しています。

各事業のオンライン化に合わせる形で、当資料館の公式ホームページのデザインやページ構成を見直し、より訴求力を高めるためのリニューアルを実施いたしました。新コンテンツの追加、多言語への対応に加えて、スマートフォンやタブレット端末における表示において改善を図りました。

ウィズコロナ・アフターコロナにおいては、オンラインによる展示、教育・普及活動が必須であり、今後はますますオンラインとオフラインを合わせた、ハイブリッドな事業実施が定着するものと考えております。オンラインコンテンツのさらなる充実と、SNSにおける情報発信においてより注目を得られるよう今後はデザイン性の向上にも努め、少しでもハンセン病問題に興味関心を持っていただけるよう改善しながら対応して参ります。

ウィズコロナ時代の教育普及事業

武蔵野市立武蔵野ふるさと歴史館 木村 遊

新型コロナウイルスの感染拡大が長期化しているなか、本年度の武蔵野ふるさと歴史館は、休館することなく十分な感染対策をとった上で通常通り開館した。当館の事業の中でコロナ禍の影響を大きく受けたものの一つが、講座や講演会等の教育普及事業であった。ここでは、本年度の当館の教育普及事業の実施概況の報告と今後の展望についての所見を述べる。

当館で実施している講座のうち新型コロナウイルス感染症の影響を受けたものはいくつかあるが、まず一つ目に挙げられるものが歴史館大学である。歴史館大学は当館の専門員がそれぞれの専門分野から武蔵野の文化や歴史について講義形式で行う通年講座として5つの講座を開講している。会場のスペースや使用器具の数の制限から例年各講座の定員は10～15人程度としていたが、本年は定員を超える応募者数の講座もあった。例年であれば、原則抽選を行って定員までの参加とするが、本年度定員を超えた講座のうちの一つは、自宅等にインターネット環境が整っていない方を優先的に対面受講とした上で、ZoomによるWeb併用講座として、受講希望者全員に受講していただくこととした。他県に在住の受講者からは、今後もWebでの受講を希望するという声もあった。コロナ禍であるか否かに関係なく、会場等の制約により人数に制限のある講座においては、Web会議ツールを利用することで、今後もより多くの方に学習の機会を提供することができるだろう。



歴史館大学「東国の中世」の講座風景

もう一つ大きな影響を受けた事業は、子供向けの講座だった。体験のための道具や資料を、ほかの受講者と共同で使用することで感染のリスクが高まることや、触ってもらえる現物資料そのものを消毒することが不可能であることから、例年行っている講座や類似する講座のうち、内容等を改めた講座もあった。

むさしの発見隊は、自然・歴史・文化等のさまざまな分野から、武蔵野市らしさを発見しようという武蔵野市内に在住・在学の小中学生向けの講座で、コロナ前はそのうちの一つに市内を歩いて昆虫を採集するという講座があった。しかし、小さな昆虫を受講者たちが至近距離で見るとは感染リスクを伴うため、昨年度より昆虫採集の講座は実施困難となった。そのため、本年度は「バーチャル昆虫採集」と題し、いきものコレクションアプリ「バイオーム」を使って、講師が昆虫採集の方法をレク

チャーしながら採集した昆虫を、受講者がタブレットやスマートフォンを通して採集（アプリで投稿）するという講座を実施した。これは、武蔵野市の公立小中学校の児童・生徒1人ずつに学習用コンピュータが配布されたことをうけて、ICTを活用した生涯学習の促進を図るとともに、他の受講者との距離を保つために観察対象から一定の距離をとることが可能なプログラムとすることで実現した昆虫採集講座であった。講座中には受講者が昆虫の採集方法や種の見分け方などを実際に見て学び、講座終了後に受講者自身が昆虫採集に出かけ、種を同定して「バイオーム」に投稿するよう、自己学習を促すことを主な目的とした。



距離を取りながら昆虫を撮影する様子

このように、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防止するために内容や方法を変更しなければならない講座もあったが、電子機器を用いることや、実践的な自己学習を促す内容に変更することなど、当館としても新たな試みであり、発見の機会となった。

一方で、コロナ禍の新たなツールでも提供できる学びとは別に、博物館の実物資料の観察や実体験を通してより大きな学習効果を得られる内容も大いにあるということを再確認した1年でもあった。当館では本年度、縄文時代草創期の石器を再現製作しその石器を使って試し切りをするなどの体験講座は、定員を抑えることで密を避けての対面受講とし、実体験することを優先させた。受講者からは石器づくりを実際に見て石器に触ることができて良かったという意見もあった。実際に博物館に来て見て触れて体験することで学習効果がより高まる講座も多く存在することは、これまでの実践からも明らかであろう。

本年度の教育普及事業を通して、コロナ禍に普及したツールや感染拡大防止の方法が、より多くの人に学習の場を提供することにつながる認識するとともに、新たな講座のあり方を見出す機会となった。その一方で、実地や現物でしか学ぶことができないことを改めて考え、選り分ける機会ともなった。これは、コロナ前の生活スタイルから大きく変化するであろうアフターコロナ時代において、博物館の教育普及事業のあり方にも通じるものであり、来年度以降も引き続きさまざまな講座の実践を通して検討を重ねていきたい。

コロナ禍での資料館・古民家園運営（令和3年度活動状況）

立川市歴史民俗資料館 浦島 利浩

前号に引き続き、立川市教育委員会生涯学習推進センター文化財係が管理・運営する立川市歴史民俗資料館と川越道緑地古民家園のコロナ禍における事業活動について紹介します。

令和3年度も、新型コロナウイルス感染症パンデミックの下、博物館ガイドライン等で示されている感染症対策を講じながら、利用見学者、イベント等普及活動の協力者、ボランティア団体、協力事業者、勤務する職員の安全に留意して事業展開したウィズコロナの一年でした。

令和3年12月、オミクロン株の発症が報道されています。デルタ株の感染が落ち着き、緊急事態宣言の解除から1か月余りでアフターコロナの模索どころか、今後の感染拡大が懸念する事態が続いています。この2年間、新型コロナウイルスの感染拡大の波が繰り返され、その影響で事業活動の自粛制限や臨時の休館園措置を行う等、数か月先の予定も立て難い状況が続いています。

新型コロナは災害級の非常事態といわれるとおり、災害時行政機関は、その対策に資源を振り向けてきます。地域の資料館が事業を継続するには創意工夫が必要で、予算を伴うアフターコロナを検討するには課題が定めきれていないのが実状です。収蔵資料や普及活動でデジタル化の動向を注視しつつ、まずは、コロナ以前の事業活動に復することから取り組んでいます。

令和3年度の開館状況 年度当初の4月は、年始からの新規感染者数が下降し、3か月ぶりに緊急事態宣言が解除された中で迎えました。僅か3週間後には、都内の感染者は再拡大し、4月12日から立川市内はまん延防止等重点措置地域に指定され、以降10月25日までの半年間は、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置、リバウンド防止期間等、不要不急の外出自粛や人流を抑制する規制が執られ、公共施設の利用に関しては制限等が設定されてきました。行動制限を求める状況下で、資料館・古民家園の開館園や事業の実施にあたっては、基本的な感染症予防対策を徹底しました。大型連休前の4月25日から5月31日まで、特措法に基づく緊急事態宣言と市対策本部の決定により、令和2年度同様に館園の展示観覧利用は全面休止になりました。文化財保護行政の事務、館園施設の維持管理事務は通常どおり行われ、現場対応が必要なことから、昨年度は行った館園休止時の職員の在宅勤務対応は実施しないこととしました。

6月1日以降も都内では緊急事態宣言等での措置は継続されたものの、感染者の減少を受け、業種による自粛制限が緩和されたため、立川市公共施設も利用を緩和し、館園施設利用も再開しました。休止前と同様に「検温、マスクの着用、手指消毒の励行」「3密を避ける」「利用人数、滞在時間の制限」「館園内の飲食禁止」「接触型展示機器の使用禁止」「主催イベントは3密回避、定員の半数、試食を伴う講座は行わない」など感染症対策を継続しました。7月に入ると、デルタ株の感染が拡がり、都内に再度緊急事態宣言が発出されましたが、施設利用に関してはこれまでと同じ対策で開館園しました。また宣言解除後の10月26日以降も、館園利用者への感染症対策に変更ありませんが、ソーシャルディスタンスの一部緩和を受け、施設内の滞

留定員を増やせることで、主に小学校のクラス単位で団体見学が可能になりました。古民家園は、屋外の展示施設のため、3密が避けられる安心感から入園者は戻りつつあります。半年近く続いた緊急事態宣言等の期間中は、外出自粛が呼びかけられ、コロナ以前に比べ来館園者は減少しましたが、解除後は混雑の少ないマイクロトラベル先として徐々に戻ってきていると実感します。来館園者は、コロナ前の令和元年度と2年度での比較で約3割減少。2年6月から11月と、3年の同月比較では資料館は1割減、古民家園は4割ほど増えています。

展示活動 前年度と同様、年4回の企画展、年中行事のお飾りや節句の人形展、写真展等のミニ企画展は予定どおり開催しています。観覧休止期間の影響で、開催期間を変更しましたが、館の収蔵資料を紹介し、事業活動の継続を伝えることが重要だと考えています。積極的に来訪を促す広報は控えましたが、昨年度から開始したTwitterや市HPを通じて、館園の情報を定期的に発信するように努めています。企画展示中に開催するギャラリートークは、見学者の密を避けるため中止にしています。企画展の題名と期間は次のとおりです。『新収蔵品展』6/15-7/11、『立川の遺跡2021』7/27-9/5、『立川飛行場と陸軍航空本部』10/26-12/12、『昔のくらしと道具』1/18-2/20。
講座・体験学習会 年間40回近い講座など事業イベントを開催してきましたが、昨年はコロナ前の6割に留まりました。令和3年度も観覧休止期間の講座は開催時期を変更し、その他は3密対策と参加定員を見直し、食文化の体験学習会は、試食する内容を変更して、講師の方々が安心して協力いただける体制を整えました。デジタル技術を導入したりリモート開催を検討しましたが、講演会は可能であっても、体験学習会はその開催効果や機材の調達、アーカイブ化での効果判定、オンライン配信のセキュリティ対策等々整理がつかず、研究を続けています。

博物館学芸員実習 9月6日から10日まで8名の実習生を受け入れ開講しました。例年は市内在住者を優先し3～4名程度で実施していますが、コロナ禍の影響で実習受け入れ館が減り、実習先が決まらないといった学生の窮状を聞き、可能な限り受け入れることにしました。市外在住者が大半で、都外の学生もいました。先の見えないコロナ禍で、次世代を担う人材育成に協力することで、地域の資料館への理解につながることを期待しています。資料に直接触れる館務実習や展示実習では、学生同士が作業や会話で距離が近づくことでの感染リスクを心配しましたが、健康のトラブルは無く終了することができました。

コロナ後の課題 事業活動の休止により、館内の資料調査や整理等の本来の学芸活動や、文化財調査に集中して取り組める機会を得ました。一方で、これまで事業活動に協力いただいていた年中行事や郷土の民俗芸能に詳しい高齢の講師がコロナ休止を機に辞めることが増えてきました。生活様式の変化で地域の生業や年中行事は廃れ、後継者は殆どいません。祭礼の伝統芸能の担い手や身近な郷土文化の継承など、地域の無形文化財を次代にどのように、引き継いでいくのが課題と考えています。

令和3年度 活動報告

武蔵村山市立歴史民俗資料館

館内のコロナ対策

令和3年度の武蔵村山市歴史民俗資料館は、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から4月25日から燻蒸消毒期間を含む6月7日まで臨時休館となりました。

昨年度の臨時休館明けから行っている来館者へのマスク着用等のお願いを引き続き掲示し、アルコールでの手指の消毒などに御協力いただいています。入口エントランスホールに掲示しているお知らせは来館者の動線上に置いてあるためか、入館してすぐに読んでくれている姿をよく見かけます。

館内に設置している映像閲覧コーナーや館内設備などの不特定多数が触れるものについては、次亜塩素酸ナトリウム水溶液を使用し定期的に消毒を行っています。消毒を行い始めてから1年以上経過しましたが、現在のところ材質の劣化等の被害は見当たりません。



入口エントランスホール

展示事業

3月上旬から5月下旬まで開催予定だった企画展「武蔵村山を歩く」及び4月上旬から5月上旬まで開催予定だった年中行事展「端午の節供」は会期中での終了になりました。

6月上旬までの臨時休館期間が明けた後は展示事業については通常通り実施しています。今年度は、ミニ年中行事展「七夕飾り」(6/26～7/7)、夏休み子ども展示「水とくらし」(7/17～9/5)、ミニ年中行事展「十五夜・十三夜」(9/18～10/18)、特別展「武蔵村山と鉄道」(10/23～令和4/1/16)、ミニ年中行事展「恵比寿講」(11/20～11/28)、年中行事展「正月飾り」(12/18～令和4/1/16)、年中行事展「桃の節供」(令和4/2/5～3/6)、分館ミニ展示「国民学校と陸軍施設」(12/1～令和4/3/27)となっています。

講座・見学会

毎年度実施している夏休み親子体験教室について、今年度は緊急事態宣言が発出されたことから中止が決定しました。昨年度実施した際は、大人のみ参加を可能にしたこと、「草木染め」でハンカチを染めるという人気のある内容だったこと、他のイベントが実施されていなかった等の要因により募集開始早々に定員に達してしまったことから、今年度は親子限定に戻し、かつ、手軽に体験できる草木染めで和紙を染めるという内容を計画していました。7月15日から募集を開始するため、市報やホームページへの掲載、ポスターの掲示等で周知を行っていましたが、7月12日に発出された緊急事態宣言により7/14に

中止が決定しました。早急に中止の周知を行ったものの、徹底することはできず、募集開始初日から申込が相次ぎました。ホームページの更新はすぐに対応したものの、市報またはポスターを見ての申込が多かったため、こういった結果になったものと考えられます。周知方法について課題が残る結果となりました。

一方、10月下旬から開催

している特別展に関連した歴史講座も「鉄道」という人気のあるテーマで実施しました。昨年度と同様、募集定員数を会議室利用定員の半数とし、座席の間隔を開けて実施しました。定員を少し超えてしまいましたが、座席の間隔を空けていたためにはならず、開催することができました。

年明けの3月には市内の文化財を巡る見学会を開催する予定です。こちらも例年より募集人数を減らすなどの感染対策を取りつつ実施できればと考えています。

博物館実習

当館では実習希望者がいる場合のみ実習生を受け入れていますが、今年度も1名の実習生を受け入れました。例年は夏期に実施している実習ですが、今年は特別展の準備などの都合から11月に実施することになりました。受入期間を決定したのは年度当初でしたが、結果的に新型コロナ第5波の影響を受けずに済みました。

実習を行う中で、大学の授業でどのようなことを習ったのか聞いたところ、オンライン授業が大半であり、実際に資料などに触れる機会などがほとんどなかったとのことでした。そこで、予定していた内容を少しずつ変更し、ミニ展示の作成や解説、講座の運営補助、資料館周辺の文化財や自然のフィールドワークを行うなど例年以上に充実した実習となりました。



実習生が担当したミニ年中行事展「恵比寿講」



中止となった体験教室ポスター

コロナ禍の帝京大学総合博物館—人工衛星から絵画鑑賞・学校史まで—

帝京大学総合博物館 甲田 篤郎

帝京大学総合博物館（以下本館）は帝京大学八王子キャンパス内に設置された博物館である。その設置目的にある「本学の教育・研究活動と連携し、総合的・学際的な活動を行いその向上を図るとともに、それに必要な、歴史、芸術文化、自然等の資料を収集・保管する。合わせて教育・研究活動の成果の公開や、他機関との連携を通じて、大学の社会貢献を推進する事」を実現するため、コロナ禍で博物館活動が制限されるなかでも教職員・学生とともに試行錯誤をしながら館運営に取り組んだ2021年を振り返る。

■ウィズコロナの1年

本館は、2020年6月8日の大学対面授業の一部再開に合わせて学内利用を再開、10月3日からの企画展（理工学部のラボのなか！—コトワリとワザの探究—）に合わせ一般利用を再開して以降、感染症対策を実施した上で館運営を続けてきた。2021年1月8日からの2回目となる東京都への緊急事態宣言では、内容を検討の上、入館制限等の措置は実施せず開館を維持。2021年4月25日からの3回目となる緊急事態宣言では、東京都の要請・協力依頼に博物館の休業が含まれていることを受け、2021年4月28日から6月18日の期間で、一般利用を休止、学内利用を継続した。この期間を完全休館にするかについて館内でも議論されたが、一部再開していた対面授業での博物館利用の要望も多く、教育機会を確保するため感染拡大防止に配慮しながら41件（/年合計90件）の授業を実施した。各クラスには入国できていない留学生もいることから、リモートで授業を受ける学生のために講義レジュメや展示動画を共有してきた。6月19日からの企画展（みんなでたのしむあーと「窓からはじまる探検！」）に合わせて、一般利用を再開して以降、本年は年間予定に沿って開館を続けた。

なお、7月12日からの4回目となる東京都への緊急事態宣言でも、開館状況に変更はなく、大学全体でも授業・試験をオンライン等には移行せずに対面で実施している。7月13日からは帝京大学八王子キャンパスにおいて、学生・教職員に向けた新型コロナウイルスワクチン接種も開始され、学芸員も接種票確認・経過観察等の接種会場補助業務を交代で分担した。本年は、学外調査や大規模対面イベントの自粛などの博物館活動の制限を受けながらも、以下に紹介する3つの企画展のほか、教員研究資料を紹介したミニ企画展「日本のアニメーション雑誌」、社会学科・経営学科・学芸員課程との授業連携展示を実施した。展示以外にも、教育事業である「多摩のヨコガオ発見プロジェクト」の一環として、本館と学生が、多摩の歴史・文化・自然・現在を記録し発信するローカルマガジン『ミコタマ』の発行、他大学博物館学芸員課程へのリモート講義、科学体験講座ミュージアムサイエンスラボ「大学でかんたん科学工作」など、コロナ禍の状況に合わせて対面とリモートを併用しながら、ウィズコロナの博物館運営体制構築に向け、手探りではあるが一步步歩を進めた1年となった。

■理工学部のラボのなか！—コトワリとワザの探究—

会期：2020年10月3日～2021年5月29日

理工学部の「ラボのなか」から生み出される「面白い」研究成果の一端を紹介する展覧会。2021年11月9日に内之浦宇宙空間観測所からイプシロンロケット5号機で宇宙に飛び立った多目的宇宙環境利用実験衛星 TeikyoSat-4 の Engineering Flight Model や、本学ヘリパイロットコースで運用しているヘリコプター（Robinson R22）の実機などを展示した。関連イベントとして開催された最新研究講座は、すべてYouTube「帝京大学総合博物館」チャンネルにてライブ配信を実施し、入館制限状況に合わせ、3月13日・4月24日は対面講義と併用、5月29日は理工学部がある宇都宮キャンパスの研究室からリモート講義で実施した。

■みんなでたのしむあーと「窓からはじまる探検！」



会期：2021年6月19日～9月18日

麻生隆悟の《窓》をメインに、130点を超える帝京大学所蔵の絵画コレクションから窓・探検をテーマに選んだ、15作家17作品を紹介する展覧会。マップ型の館内案内リーフレットを作成し、一人から家族連れまで誰でもゆったり絵画鑑賞を楽しめるように企画した。会期中には、より能動的に絵画に親しめるイベントを対面で22回実施した。また、小学校図画工作授業への協力として、9月3日に同展示室と武蔵野市立第五小学校をGoogle Meetで繋ぎ、鑑賞の授業を3コマ実施した。

■帝京ことはじめ— SINCE1931 — 帝京商業学校の物語



会期：2021年10月6日～2022年4月30日

1931年、代々幡町に開校した帝京商業学校を紹介する展覧会。帝京大学の起源である、夜間制の男子商業学校として開校した同校の教育や、創立期・戦災の苦難に教職員・生徒たちがいかに立ち向かったのかについて、写真や公文書から再検証を行った。

ウィズコロナ、アフターコロナに向けて

江戸東京たてもの園 阿部 由紀洋

再び臨時休園

令和3年度の江戸東京たてもの園は、昨年度と同様臨時休園で幕を開けました。実際には、令和2年末の休園期間から令和3年の5月末まで臨時休園となり、昨年同様、桜の開花時期とゴールデンウィークのいずれも賑わいを見せる時期を、またしても休園という形で迎えることとなりました。

事前予約制の導入

6月1日(火)、入園前の検温や手指の消毒、マスクの着用などのほか、建物の公開方法についても前年度を踏襲する形で開園を再開しました。前年度から大きく変わったのは、オンラインによる日付指定の事前予約制を導入したことでした。比較的高齢な方々の入園が多い当園にとって、この制度がバリアになってしまうことも考えられましたが、実際には昨年度の同時期とくらべて、来園者数の大幅な減少はありませんでした。コロナ禍においてさまざまな場面でオンライン予約をする機会が増えたためでしょうか。

事業の実施

冒頭に記したとおり、ゴールデンウィークは休園で迎えたため、5月4日と5日に実施を予定していた「こどもの日イベント」は、2年続けて開催することができませんでした。またオリンピックとパラリンピックの間に開催を予定していた「夜間特別開園 下町夕涼み」も、緊急事態宣言発出中ということもあり、こちらも2年連続で開催を見送りました。このほか規模は小さいですが、園内のウメを収穫しての梅干しづくりや七夕など、季節感のある催しについては、職員主導で実施し展示のみ、という形で行いました。その後、次第に新規感染者数が減少していったことから、11月に実施の「夜間特別開園 紅葉とたてものライトアップ」は予定どおり開催することができました。この事業は昨年度も開催できたのですが、今回もワークショップは実施せず、建物から漏れるあかりや専門家監修による建物や木々のライトアップのほか、囲炉裏や暖炉の火入れなど、鑑賞型の事業としました。そして、正月2日・3日の無料開園と10日の「成人の日はたてもの園へ」では賑わいを取り戻したものの、再度の感染者数の増加を受け、1月11日から都の指導によりまたしても休園となってしまいました。

展覧会の開催

臨時休園の長期化などから展覧会事業が見直され、本館の江戸東京博物館と同時開催する「縄文2021」展は、令和2年度の開催が1年先送りされました。このため、その前回にあたる特別展「ぬくもりと希望の空間～大銭湯展」を4期構成の展覧会とし、開催を続行することにいたしました。それでも、令和2年3月3日に初日を迎えるはずが、臨時休園の影響で6月2日へと延期になったり、3期として開催を予定していた会期が、すべて臨時休園にあたってしまい実施できなかつたりと翻弄されました。さらには、オリンピック・パラリンピック開催期間中の展覧会として、インバウンドを意識し、わが国独自の銭湯文化を紹介する企画でしたが、その面では目的を果たすことが

できませんでした。しかし、資料の提供者のご理解もあり令和3年9月12日まで開催することができ、ロングランの展覧会はおおむね好評を得ることができました。

その後を受けて、「縄文2021—縄文のくらしとたてもの—」が10月9日より、江戸東京博物館の「縄文2021—東京に生きた縄文人—」と同時にスタートしました。この展覧会では、江戸東京博物館の藤森照信館長の設計・制作指導のもと、園内に縄文時代の住居を1棟制作しました。この作業は、臨時休園中だった2月から始められ、途中の中断をはさみながら8月上旬まで続けました。展覧会開催から約1か月後には、YouTubeを利用したオンラインイベントを、縄文住居の前で始めて実施しました。通信環境があまりよくない園内からのライブ配信ということで、メイン会場周辺の確認やリハーサルなど入念な準備をして臨んだ催しでした。その時の様子は、現在江戸東京博物館の公式YouTubeチャンネルにアーカイブされ公開しています。



「ギモン! 質問! じょうもん教室」ライブ配信の様子

ウィズコロナ、アフターコロナ

新型コロナウイルス感染症が完全に終息したとはいえ不安感がある中で、たてもの園のウィズコロナをどのように進めていくのが、これからの課題です。中でもボランティア活動は、令和2年の2月以来休止を継続しています。今までお願いしていた囲炉裏やかまどへの火入れは、それらを使っていた時の様子を再現するのみならず、建物の防虫という維持管理の上でも大切な作業です。また、来園されたお客様へのガイドや、園の事業の手伝いなど、さまざまな活動をしていただいております。今後の感染状況を踏まえ、活動再開に向けた検討を重ねているところです。

そして四季折々に実施している事業についても、これまでの参加体験型から見て楽しめる鑑賞型へと転換をするのか、それとも参加人数を限定して体験型の事業を実施するのか、あるいはオンライン化していくのか。ウィズコロナ、アフターコロナのもとでの博物館活動を、これからも試行錯誤を重ねていきます。

臨時閉館 21 ヶ月の舞台裏

国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館 具嶋 恵

2020年4月に臨時閉館の措置に踏み切った以降、当館では学外者の大学入構を前提とする特別展と公開講座の開催を断念、替わってオンラインでのイベント実施と情報発信を続けてきました。一方で、学内向けの館内利用と学芸員養成課程の授業支援は、コロナ禍以前よりも積極的に推進しており、新しい時局における大学博物館としての在り方を模索しています。

21ヶ月にわたる臨時閉館中に、学びと交流の新たな場を提供するべく試行錯誤し再開館に備えてきた過程を、本誌第42号に続き振り返ります。

ライブ配信イベントの定着

年三回館内でおこなっていた定例の公開講座は、昨年度より開催形式をウェビナーのライブ配信に変更しました。インターネット初心者が取り残されることのないよう、分かりやすい参加手順書を送付し、電話で問合せに対応するなどの対策を講じた結果、従来の常連の方の参加を維持しつつ、海外を含む遠方からの新たな受講者を増やすことにもつながりました。参加人数の上限を気にすることなく、またスライドや映像を見やすく提示できるなどオンライン形式のメリットは多く、今後、感染状況が収束した後も、インターネットを活用した企画を一定数継続していくことも検討しています。



ランチタイムトーク配信の様子

今年度実施のオンラインイベントは以下のとおりです。

- 5月29日 公開講座「ICUの考古学」（講師：林徹氏）
- 9月28日 ランチタイムトーク「私とICU」（講師：大西直樹氏）
- 10月16日 公開講座「キャンパスと建物から見たICUの歴史」（講師：岸佑氏）
- 同日 ドコモモ・ジャパン 2020年度選定「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」記念講演会（講師：山崎鯛介氏、加藤雅久氏、岸佑氏、樺島榮一郎氏）
- 11月6日 泰山荘オンラインイベント「キャンパスの文化資源」（講師：松田陽氏）
- 2022年1月29日 公開講座「奇妙な世界を巡る一幕末日本が生み出した絵双六」（講師：ロバート・エスキルドセン館長）
- 2月15日 ランチタイムトークII「私とICU」（講師：佐野好則氏）

館内でのハイブリッド授業

オンラインと対面を組み合わせた授業体制の継続という本学

の方針に沿って、館員が講師を務める学芸員養成課程のクラスを中心に、館内で授業を実施しています。博物館学の性質上、多くはオンラインと対面を同時におこなうミックス型を取っていますが、第5波の報を受けた8月後半の博物館実習(集中)は、やむを得ず全日オンラインでの開講となりました。受講生の自宅に急遽ダンボールに詰めたキット一式を送付し、モニタ越しで講師とTAがひとり一人に指導をおこないました。



オンラインでおこなった博物館実習

より良い学習環境を提供するためには設備面の準備も欠かせず、館内に大型モニタやマイク、ウェブカメラなどの機材を新たに設置したほか、館員が配信技術やウェブ知識の習得と共有に努め、様々な事態に対応しています。

他館との交流と協働

三博協のほか、ICOM（国際博物館会議）、日本博物館協会、全国大学博物館学講座協議会など、館または館員が加入しているカンファレンスで他館との交流を保つことができたことは、大きな支えとなりました。大学博物館や民藝館同士のオンラインでの集まりや、コロナ禍を契機に発足した「おうちミュージアム」のつながりから、多くの情報収集と共同作業の機会が生まれました。特にICOM日本委員会における博物館定義の見直し作業には、複数の館員が中心メンバーとして尽力しています。



ウェブサイトで再開館を告知

長らく通常開館を見送ってきましたが、大学の方針の一部緩和を受け、いよいよ2022年1月より一般来館者に向けて再開館することになりました。未だ先行きは予断を許さず、日時を限定しての事前予約制からの試行となります。今後の状況次第となりますが、いずれにせよこの21ヶ月の経験と準備を活かして、来年度以降も積極的な館運営を展開できればと考えています。

博物館のウィズコロナ・アフターコロナ

小金井市文化財センター 高木 翼郎

令和2年からの新型コロナウイルスの感染拡大により、イベント中止といった大きな影響を受けた。今年度に入っても、緊急事態宣言発出で4月27日から宣言解除まで臨時休館を余儀なくされ、結果再開したのは6月であった。

再開後のセンター利用については、(公財)日本博物館協会「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」を参考に、館としての基準(ガイドライン)を設けて様々な利用制限を実施しながらの運営を目指したが、基本的な方針は「感染防止対策を入念に行い、可能な限り展示を公開し続ける」ことであり、これは現在も継続中である。

ウィズコロナの時代、学芸研究の継続性及び資料の公開・活用のためには、それこそ様々な手段の検討が必要であり、現実として多くの施設で展示の制限、各種事業のオンラインへの移行などが検討・実践されてきている。そのような中で、当館では、昨年度、新型コロナウイルスの感染拡大の防止策を講じながら物理的な展示空間をどう運営するかに注力する方針をとり、それ以外の博物館活動(特に交流事業)は縮小あるいは一時停止、中止することとなった(『ミュージアム多摩No.42』参照)。今年度は、この条件の下で取り組んできた対策・事業について報告する。

小金井市文化財センターでのコロナ感染拡大防止の対策

対策内容や来館者への注意喚起についてはホームページで事前の周知を行った。ホームページの内容は次の通りである。「①発熱や咳など風邪症状の見られる方、体調がすぐれない方のご来館はお控えください。②入館する際は、マスク着用をお願いします。③感染防止のため、手指の消毒の徹底をお願いします。正面入口のアルコール消毒液を使用してください。④施設内では、一度に入室できる人数を制限させていただきます。状況によっては、お待ちいただくことがございます。⑤「咳エチケット」や「人との間隔2メートル」にご協力ください。⑥観覧途中で体調不良を感じられた時は、速やかに館内のスタッフにお知らせください。⑦団体で見学される際は、事前にご連絡ください。」

主に次のような対策を実施している。当館は、土足での入館が不可であるため、館のスリッパに履き替える必要がある。これまでは、不特定多数の来館者がスリッパを繰り返し使う状況であったが、一人一足のルールを徹底した。具体的には「消毒済み」と「使用済み」のスリッパを視覚的に区別する配置方法で対応した。使用済みのスリッパは、大多数の来館が発生しなければ閉館後にまとめて消毒を行っている。

コロナ対策の方法が一般的に論じられるようになった際、「密」を避ける距離として2メートルの間隔を確保することが必要とされた。当館では、再開館にあたって公開する展示室の面積を検討した結果、一時的な館内滞在者の上限を20人として入館制限を実施した。制限方法としては、入口で来館者が履き替えるスリッパの使用数でカウントし、上限に達しそうになると入館を停止して調整を行った。

展示空間やイベントの対応

展示と入館者に関わる項目以外では、次の通りであった。交流事業については、昨年度の各種行事はすべて中止せざるを得なかったが、今年度は春季・秋季の企画展を何とか開催することができた。非常事態宣言が明けた秋からは、文化財講演会や地域史講座・史跡めぐり等の参加者を募るイベントを実施することもできた。

図書館との連携

非常事態宣言の発出の有無に関わらず、「外出自粛」「リモートワーク」「すごもり」で、在宅時間を有効利用しようという意識が高まった。これが行政に対しても様々な面で変化が求められた。当館を所管する生涯学習部でも積極的な対応が進められてきている。殊に図書館がサービスを開始した、PCやスマートフォンで手軽に読書ができる「こがねい電子図書館」は利用者から大きな反響があった。当館では「こがねい電子図書館」をより特色あるものとするために、郷土資料の紹介・公開という観点で当館所蔵の資料群に白羽の矢が立った。近年、博物館資料のデジタルアーカイブが図られてきている中で、当館もアーカイブの重要性は認識しているが、それを稼働・運営するための体制は整っていない。「こがねい電子図書館」には大きな可能性を感じるとともに今後のデジタルアーカイブを睨み、当館(及び生涯学習課)は電子図書館への資料提供で図書館と連携している。現状(令和3年12月時点)では、絶版本の旧『小金井市誌』や『小金井市文化財センター通信』のような広報誌をはじめ、『小金井市の歴史散歩』(100円)のように一部の有償刊行物が電子図書館で自由に閲覧することが可能である。今後は、「こがねい電子図書館」を介して当館コレクションの名勝小金井(サクラ)の明治・大正期の絵葉書を公開する計画である。

当館の老朽化や人員体制などの課題は多々ある中で、ウィズコロナ・アフターコロナを前提とした事業展開を描かなければならないのも事実である。今後、図書館との連携事業のように、オンラインで広がる新しい視点でウィズコロナ・アフターコロナに取り組める体制になれば、中長期計画を踏まえての新規軸に向かえるのだと考えている。



上：こがねい電子図書館ホームページ
左：スマートフォン画面

令和3年度活動報告

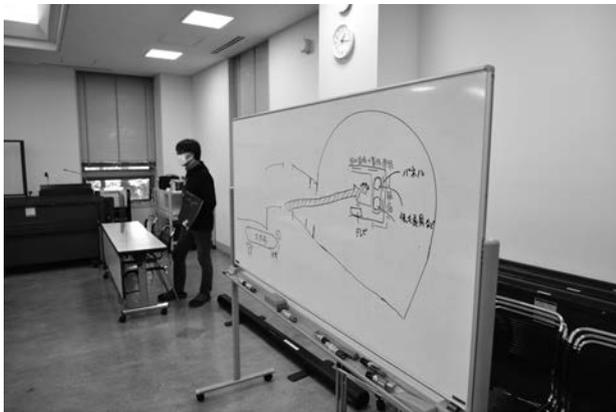
東京都立大学91年館（学芸員養成課程展示室・実習室） 加藤 早百合・堀 智博

展示・授業・学内代替措置について

令和3年度における東京都立大学91年館の活動は、未だ止むことのないコロナ禍により、行動制限を余儀なくされた1年だったと言えます。

第一に、展示室については昨年度に引き続き、臨時閉室を現在まで継続しています。皆さんに展示をみていただけないことは大変残念ですが、しかし、この状況を悲観してばかりはいられません。新年にはコロナ禍が収まることを見越して、今まさに開館に向けた準備・話し合いを進めているところです。具体的には、本学オープンユニバーシティ（生涯学習講座）と協力・提携のもと、オンラインを視野に入れたイベントの開催を計画しています。

第二に授業について、当館では例年学芸員資格取得をめざす学生を対象とした講義・実習が行われます。今年度前期の間は、コロナ対策の観点からオンライン授業を実施せざるを得ませんでした。感染者数が収まってきたこともあり、後期の授業からは、対面での授業を行うことが出来ました。実技を含む専門性の高い授業は、画面越しに見聞きするだけではどうしても限界がありますので、対面授業の再開は本当に喜ばしいことです。もちろん、授業実施の前提として、感染対策は引き続き徹底して行っています。



学内代替措置の授業の様子

第三に、学外の博物館実習の受け入れが叶わなかった学生を対象に補講授業（学内代替措置）を実施しました。

昨年度も本誌にてご紹介させていただきましたが、実習の一環として館内で仮想展示を行った他、今年度は新たに、牧野標本館（故・牧野富太郎の採集品の他、約50万点の植物標本を所蔵）にも協力を依頼し、植物標本の分類・管理方法について学習し、実際にソーティング作業も行いました。

なお、感染状況によっては、博物館側で実習生の受入人数を制限せざるを得ない状況が今後も続くことが予想されます。去年・本年度はひとまず学内代替措置を実施することが認められましたが、来年度以降はたしてどうなるのか、実習の対応に不安を抱えています。恐らく当館に限らず大学附属博物館の関係者は同じように悩んでいることと思います。この点ぜひ三博協の中でも協力・情報共有の場をもてたらと希望します（堀智博）。

丸木舟展示ケースの製作

2019年9月に、本学へ到着した丸木舟。スギの丸太を削りぬいて作られた舟は、大きさは全長約7.5m、幅および高さは約60cm、重さは約350kg。削りぬいた部分は、大人が5人乗れるスペースがあります。この丸木舟は実験用に作られた舟で、2019年7月台湾から与那国島へおよそ45時間かけて渡りました。

丸木舟はこれまで、シートや密閉袋で覆い風雨をしのぎ、虫などの被害から守る工夫をしていました。大きすぎて屋内への搬入はできず、既存の展示ケースではサイズがなく、オーダーメイドで設計することになりました。

いざ展示ケースを製作しよう、となると、設置場所の検討、丸木舟の出し入れも考えたケースの仕様、屋外展示のため雨や虫の侵入を防ぎながら、展示ケースとしての役割も……。いくつかあった検討事項を1つずつクリアし、施工担当者はこちらの要望に応じて設計図を作成してくださいました。

2021年6月某日、いよいよ展示ケースの製作が始まりました。土台のコンクリートを打設し、敷地レベルを整えることから始まった初日は、まさかのわか雨に襲われ、一時中断を挟みましたが、無事にその日の工程を終了。その後はコンクリートが乾くまで1ヶ月ほど待ちました。7月下旬、2日間に渡り、展示ケースの設置と展示ケース床となるコンクリートの打設が行われました。展示ケースが設置されると、いよいよケースの形になってきました。夏日となったこの日はとても暑く、ケース内で作業してくださる作業員の方々は汗だくの作業でした。

7月末、丸木舟がケースに納まり、展示ケースは完成しました。現在展示室は、学内者のみの公開に限定されていますが、皆さまに丸木舟をご覧いただける日が来ることを心待ちにしています（加藤早百合）。



展示ケース製作の様子

ウィズコロナと五日市郷土館の記録

五日市郷土館 小澤 雅也

新年度、春。

令和3年度になりましたが、引き続きコロナ禍での館運営でした。具体的には昨年度から行っている感染対策として、入館記録票への記入、手指消毒、入館人数の制限、ソーシャルディスタンスの確保等です。夏に迫った東京オリンピックが開催できるのか、開催するとしたらどういった大会になるのか、開催について肯定的な人もいれば否定的な人もいる、そんな雰囲気漂っている春でした。

三度目の緊急事態宣言

感染者の増加により緊急事態宣言が発出され、4月25日から臨時休館となりました。新年度が始まって1か月足らずで再びの休館。2年目となると、さすがに異常事態にも「慣れ」が出てくる部分もありましたが、繰り返される緊急事態宣言に確実に気持ちが疲弊してきていました。「準備した企画展が開催できない。」「これまでは来館者と気軽に交流していたが、今はお互いに少しピリッとすする。」など、これまで通りではいけないということが、じりじりとストレスになって来た期間でした。当初5月初旬に設定されていた宣言期間は感染者の下げ止まりのため、最終的には5月末まで延長となりました。

宣言解除により開館スタート

緊急事態宣言が解除された後、6月1日（火）から開館が再開しました。市の感染症対策本部の判断を元に館運営のガイドラインを作成し、それに沿った形での再開でした。展示としてはミニ企画展「郷土の古文書その33 渴命の百姓拝借夫食請取証文」を開催しました。市内から発見された古文書を読み下しや口語訳とともに解説する継続的な展示です。HPでも資料をPDFで公開しています。

ワクチン接種とオリンピックの夏

6月から8月にかけて、全国的にワクチン接種が行われました。当館からも常勤職員3人がシフト制でワクチン接種業務に従事することになりました。3人の内の1人が派遣されるというのは、窓口を持つ施設としてはかなり厳しい状況でした。改めて、職員の拡充の必要性を感じました。

展示としては、7月の七夕にあわせて旧市倉家住宅の入り口で「七夕飾り」を行いました。



また、東京オリンピックにあわせた企画展「オリンピックとあきる野」を行いました。前回の東京オリンピック（1964年）の聖火トーチや公式報告書、ポスターと一緒に今年行われたオ

リンピックのポスターやのぼり旗を展示しました。展示準備の段階で、地下収蔵庫に保管されていた前回ポスターに感動したことを覚えています。温故知新とはまさにこのこと。古臭さの無い洗礼されたデザインで、改めて過去の物と向き合うことの楽しさを感じました。

静かな初秋、2年目。

7月からの緊急事態宣言が引き続いてきた9月。ワクチン接種は進んでいましたが、宣言が発出され続けていたため今年も地域の祭りは中止となりました。地域によってはどうにか盛り上げようと、録音したお囃子を車から流しながら地域内を巡回するなどの工夫をしているところもありました。下を向いてばかりはいられませんね。コロナ以前の夜空に鳴り響くお囃子の音色が恋しいです。

展示としては旧市倉家住宅で年中行事「十五夜」を実施しました。縁側にごぎを敷き、一升瓶に挿したススキと野菜、団子を飾りました。

2年ぶりの講座

9月末に緊急事態宣言からリバウンド防止期間になりました。その期間も10月25日には基本的対策徹底期間へと変わり、当館では館内の人数制限が解除されました。そんな中行われた東京文化財ウィーク。当館としては昨年度に都指定文化財となった「真照寺の猿曳駒絵馬」について講座と特別展示を行いました。講座は、絵馬について調査を行った齋藤慎一先生にご講義いただきました。文化財ウィーク期間中は気候が良く、来館者も多かったです。以前のような「行楽の秋」を感じる期間でした。



11月にはミニ企画展「郷土の古文書その34 飢饉の節稗貯えのための郷蔵建設請証文」と旧市倉家住宅での「七五三」展示、12月からは年中行事「正月飾り」として羽子板と破魔矢を飾っています。

これからについて

発生してから2年が経とうとしている今でも、コロナとの関係は変化することが多く、安定しない日々を強いられています。社会全体のこれからの見通せない今、博物館としてできることはあるのか。博物館や文化財の存在意義を、今一度考えてみるころにこれからの博物館があるように感じます。

町田市立自由民権資料館 コロナ禍での活動

町田市立自由民権資料館

はじめに

《自由民権資料館ってどんな施設?》

自由民権資料館は2つの特長を持っています。

①「自由民権運動」を柱に据えたテーマ館として、町田を中心に、多摩・神奈川の民権運動関係史料を収集・保管し、整理・研究した成果で常設展示や企画展示を行います。

また、紀要『自由民権』誌上で、全国各地の民権研究・活動の情報交換の場をもうけるとともに、寄せられた民権運動研究論文や文献情報を掲載するなど、自由民権運動研究のネットワークの核になるよう努めています。

②町田市域に関する歴史資料などを、収集し閲覧できるようにするとともに企画展示をおこない、郷土資料館としての役割を担っています。



《2021年度自由民権資料館が進化?》

2021年4月から、町田市立博物館で収蔵していた民俗資料が自由民権資料館に仲間入りしました。

町田市三輪町にある三輪の森ビジターセンターの郷土資料展示室にて、展示・紹介しています。

町田市は、これまで個々に活動を行ってきた考古・民俗・歴史分野を一体的に捉え、新たな町田市の歴史を描いていけるように活動をしていきます。

※三輪の森ビジターセンター

所在地：東京都町田市三輪町740番地

開室時間：9時から16時まで

休室日：月曜日（祝日の場合は開室し、翌日休室）、

年末年始（12月29日から1月3日）

《自由民権資料館はどのような事業を展開しているの?》

大きく分けて5つの事業に取り組んでいます。

①史料収集・整理・保管・調査研究：市域の皆様から史料の寄贈・寄託を呼びかけ貴重な史料が散逸しないように努めています。

②展示事業：常設展・特別展・企画展など

③普及事業：民権カレッジなどの講座・史跡を散策しながら市域の歴史を紹介するフィールドワーク・小中学校への出張授業など

④図書刊行：紀要『自由民権』・民権ブックス・史料集など

⑤広報事業：ホームページ・Twitterなどの情報発信

コロナ禍での活動

自由民権資料館では、館内にとどまらない活動を積極的に実施しています。

2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、館内で行っていた講座などを、市内の広い会場を借りて実施しました。会場では、マスクの着用及び手指消毒や検温、換気などの感染防止対策を徹底し開催しました。

今回は、2021年度に実施した講座やイベントの一部を紹介します。

《特別講座「町田市史史料集を読む」(全3回)》

『町田市史』と同時期に刊行された『町田市史史料集』から講座ごとに1点の史料を取り上げ、その史料を深く読み解くことによってみえてくる時代背景や地域の歴史像を描き直すという試みの講座を開催しました。

開催日：11月14日(日)、28日(日)、12月5日(日)

会場：町田市立中央図書館ホール



※100名以上収容可能な会場を借りて、50名を定員として募集し開催しました。座席を前後左右1席空けて間隔を確保しています。写真は当日の様子です。

《石阪昌孝ゆかりの地巡見ツアー》

2021年度第2回特別展「石阪昌孝—豪放磊落な民権家の生涯—」の関連イベントとして開催しました。

従来館内で行っていた展示解説に代えて、今回は、コロナ禍でも安心して参加いただけるように、展示に関連のある史跡を散策しながら解説を行うイベントとしました。

開催日：10月24日(日)、11月3日(水・祝)、23日(火・祝)

コース：野津田コース・原町田コース・八王子コース



福生市郷土資料室における令和3年度の活動

福生市郷土資料室 せいがい 青海 伸一

はじめに

今回の報告では、福生市郷土資料室における、令和2年度から引き続き新型コロナウイルス対応のうち、昨年度の報告では触れることのできなかったことや、令和3年度の特徴的な活動などを中心に報告したいと思います。

新型コロナウイルス関連資料の展示活動と資料収集活動

前回報告時に、2月から実施予定の企画展示の中で、収集に努めている新型コロナウイルス関連資料を展示することを記載しました。

この展示については、令和3年2月6日（土）から4月18日（日）まで開催した福生市制施行50周年記念企画展示「福生市郷土資料室のコレクション展」において、10のテーマを設定した中の一つ「新型コロナウイルス関連資料」として取り上げ、展示しました。



「新型コロナウイルス関連資料」の展示の様子

展示の詳細や資料収集の経緯などについては、『多摩のあゆみ』第182号「特集 コロナ禍に向き合う博物館」でも取り上げていただき、福生市郷土資料室として新型コロナウイルス関連資料の収集や展示を行うことについて、多くの方に知っていただくことができました。

令和3年度も引き続き、市内における緊急事態宣言中の写真撮影を行ったほか、緊急事態宣言が発出されたことを伝える新聞を収集するなど、継続した活動を行い、新型コロナウイルスと向き合う同時代資料の収集に努めました。

緊急事態宣言を踏まえた対応

緊急事態宣言発出を踏まえた対応としましては、4月25日（日）から5月31日（月）までの期間臨時休館となりました。この間予定されていた企画展示は、4月24日に始まり、1日のみ開館しそのまま休館となりました。当初予定していた開催期間は6月27日までで、臨時休館が明けてからも1月近くの会期を確保できたこと、令和3年度はその後の予定が詰まっていたこともあり、会期の変更なども行わないこととしました。なお、臨時休館中に予定していた企画展示関連講座は、開催日程を延期し実施することとなりました。

また、臨時休館中の取り組みとして、子どもたちが自宅で楽

しく過ごせるようにと、令和3年4月に実施した小学生向けワークショップ「からくり絵を作ろう」の内容について、新たに動画（約6分）を作成し、型紙とともにホームページ上で公開するという、福生市郷土資料室においては初めてとなる試みを行うこととしました。



福生市郷土資料室ホームページ「おうち博物館」のページ
(<https://www.museum.fussa.tokyo.jp/archives/2242>)

臨時休館後の事業等の取り組み

月に一度行っている小学生向けワークショップは、臨時休館中を除き、人数制限等の感染対策を行い実施することとなりました。ただし、例年夏休みに予定していた見学会などは内容を変更し、ワークショップとして開催しました。特に人気のあるワークショップは、人数を通常の半分程度まで抑えたうえで、同内容で一日に2回実施するなどの工夫を行いました。

大人向けの事業についてもその多くを実施することとなりました。古文書学習会や展示解説会などは、感染症対策に加え人数制限を設け、事前予約制にするなどの対応を行いました。

また、博物館実習についても内容を大幅に変更し、できるだけ密にならないよう工夫をしながら、学生たちにとって貴重な学びの機会を確保できるように努めました。特に、コロナ禍での開催であったことから、博物館が新型コロナウイルスとどう向き合っているのかということについて考えてもらう機会とし、ホームページを用いた動画の公開などについても取り組んでもらうなど、従来の博物館実習では取り組んでこなかった内容も意識したプログラムとすることとなりました。

まとめに代えて

令和3年度の事業もその多くは手探りの中進めることとなりましたが、三博協での研修を通して得られた他館での取り組みなどを参考にしながら、どうしたら事業を開催することができるのか、どうしてもできないのなら、他の方法は考えられないのかと知恵をしばり、新しい試みに取り組んできました。

福生市郷土資料室では、建物の改修工事のため、令和4年4月から令和5年12月まで休館することとなっていますが、休館中もどのようなことができるのかを考え、コロナ禍における取り組みを最大限生かし、工夫を凝らした博物館活動ができるよう取り組んでいきたいと思っています。

令和3年度活動報告～コロナ禍の試み～

調布市郷土博物館 小堀 槇子

新型コロナウイルスへの対応の経過

調布市郷土博物館では、国・都の緊急事態宣言等に対応した市の方針を受け、令和元～3年度に2度の臨時休館の措置を取りました。1度目は令和2年3月28日から臨時休館とし、6月2日に再開館をしました。また、令和3年4月に調布市が「まん延防止等重点措置」の適用を受けたことにより、市施設は利用休止、イベント等は原則延期またはオンライン開催とされたため、4月27日から5月11日まで臨時休館の対応を行いました。

再開館後は、「調布市公共施設の開館・利用における感染拡大防止ガイドライン」で示される感染防止対策に基づき、施設利用や事業・イベントの実施を判断しています。現在も来館者は40人の人数制限を設けており、団体見学もその範囲内であれば受け入れています。入館票は館内で感染が確認された場合に備えて氏名や連絡先の記入欄を設けていましたが、令和3年12月から欄を削除し、検温の実施により来館者の体調を確認しています。また、当館が管理する深大寺水車館は、観光地に立地することや敷地が狭いことから密を防ぐため、展示回廊と水車小屋内を閉鎖し、水車小屋の外観のみ見学できるようにしてきましたが、令和3年11月から展示回廊の見学を再開しました。



【写真】郷土博物館入口の入館票記載台（2020.6.5撮影）

コロナ禍での展示・関連事業

臨時休館期間以外は、常設展・企画展・ギャラリー展等の展示を予定通り開催しました。令和3年度は、夏季企画展「調布にオリンピックがやって来た！～1964年あの頃～」（7月6日～9月20日）、秋季企画展「川と水のある暮らし～多摩川・野川と調布～」（10月5日～12月12日）、郷土学習展「ちょっと昔の暮らし」（令和4年1月12日～5月29日開催予定）、年中行事や新収蔵資料などを紹介するギャラリー展示を実施しました。

夏季企画展は、1964年の東京オリンピックをテーマに、市内外の方々より資料を借用して構成しました。企画展の関連事業として行ったゲストイベントは、広さの確保できる市施設を利用して、定員縮小・消毒・換気等の感染症対策を講じながら対面で実施しました。1964年に調布市の聖火ランナーをつとめた2名の方に登壇していただき、学芸員の質問に答える形

式で当時を振り返るトークと、お二人が持って走ったトーチを掲げて会場内を走る体験を行いました。参加者には、実際のトーチの重みを感じながら聖火ランナー気分を体感していただきました。

多摩川・野川をテーマにした秋季企画展は、世田谷区立郷土資料館の特別展「多摩川と世田谷の村々」（10月23日～12月5日）と同時期の開催となり、当館所蔵の川船模型の貸出のほか、相互の館での展示解説「世田谷区立郷土資料館×調布市郷土博物館コラボギャラリートーク」を実施しました。積極的に周遊を促しにくい状況での開催でしたが、チラシに相互の館の展示案内を掲載するなどの広報協力を試みました。

博物館を飛び出して（学校出前講座）

教育普及事業は、昨年度と同じく、対面で指導するため距離を保つことが難しい体験や講座の実施を見送りました。特に年中行事や伝統的な技法を体験する「子どもはくぶつかん」や夏休みの勾玉づくり、土器の拓本の事業を中止し、代替事業として展示室内のクイズラリーなどを実施しました。

毎年1月から開催する郷土学習展は、小学3年生の昔の道具・暮らしについての調べ学習に対応する内容で構成しています。令和2年度は、学習指導要領の改訂にあわせて展示内容を見直して、調布市の景観の変化がわかる写真や地図を紹介しました。例年は、展示期間にあわせて市内の小学校の団体見学を受け入れており、石臼・背負い籠・足踏みミシンなどの道具を実際に使う体験プログラムを組んでいます。昨年度は、入館者数を40人に制限していたため、学校ごとの団体見学の受け入れを断念せざるを得ませんでした。そこで、博物館職員が数点の民具資料とともに学校に向いて授業を行う出前講座を実施しました。市内の小学校13校から申し込みがあり、1月26日から3月3日まで計20回の講座を行いました。講座ではパワーポイントを使用して、明治・大正・昭和の暮らしの道具の変化や調布の街並みの移り変わりを解説するとともに、職員が黒電話や天秤棒などの道具の使い方を実演しました。感染症対策として実物資料に触る体験は行いませんでしたが、道具を観察する時間を設けました。

職員の説明の時に道具の細かい部分が見にくい、資料画像やワークシートのデータのやり取りに学校の機器が対応していないなど、手探りの試みの中で出前講座ならではの課題が見つかりました。一方で、学校では、感染症対策のため校外学習の多くが中止となり、職員が学校に向く出前講座は好評だったようです。これまで団体見学の機会が少なかった遠方の学校の児童・保護者が出前講座後に来館するケースもあり、郷土博物館の認知度向上にも効果がみられました。

令和2・3年度は新型コロナウイルスに対応した事業の形を模索しながら取り組みました。その中で得た経験や課題を踏まえて、今後も職員一同知恵を出し合いながら地域に根差した博物館活動を続けてまいります。

コロナ禍での令和3年度活動と情報発信

瑞穂町郷土資料館けやき館 北爪 寛之

令和3年度の当館でのコロナ感染症への取り組みを含めた活動を報告します。昨年度と同様、令和3年度も新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、大きく活動が制限された一年でした。当館では、政府の緊急事態宣言の発出に伴い、4月27日(火)～5月31日(月)までの期間を臨時休館とし、職員は人数を減らして勤務をしました。また、イベントなども大きく制限され、中止や延期となったものもありました。まだ、ウィズコロナやアフターコロナというには不十分な状況ではありますが、当館の活動について紹介します。

○現在のコロナ対策

来館者に館内を安全に観覧・利用してもらうため、次のような取り組みをしています。

入館時には、①アルコールでの手指消毒の協力、②マスク着用、③ソーシャルディスタンス、④混雑時の入館制限を呼び掛けている。また、来館の際には、サーマルカメラで体温の測定をお願いしています。緊急事態宣言中は、来館者連絡先の記入(2週間の保管)のお願いをしていましたが、宣言解除に伴い現在は行っていません。ただし、講演会などのイベント参加者に関しては、2週間の名簿保管をして備えています。

○常設展示

常設展示については、昨年度は通常通り見学できていたものの、ハンズオンの展示は全て休止という対応をしていました。その後、タッチパネルを用いた展示(鳥の声クイズ)についてはタッチペンを使用することで使用可能とするなど、ハンズオン展示の一部を使用できるようにしました。

○企画展示

企画展は、予定した5つの企画展、①身近な昆虫、ここが面白い!(会期:4月10日～7月4日)、②ふるさとの鉄路-八高線と瑞穂町の公共交通のあゆみ-(会期:7月20日～9月20日)、③瑞穂の狭山茶(会期:10月9日～12月5日)、④瑞穂の天体写真(会期:12月18日～令和4年(2022)2月6日)、⑤ひなまつり展2022(会期:2月18日～3月6日)を実施しました。

ただし、①の企画展の本来の会期は4月10日～6月20日までだったものの、コロナ感染症の拡大により会期を延長しました。関連のイベントも展示解説など実施することができました。これらは昨年度、コロナ対策(人数制限やソーシャルディスタンス)をしながらイベントを開催できないか試行錯誤した結果といえます。

○講演会・イベント・学校関連

当館での講演会・イベントについては、緊急事態宣言中は、定員を通常の半分、もしくは1/3に減らして実施しています。また、現在(緊急事態宣言後)は全てのイベントを通常の半分を定員としています。臨時休館中(4月27日～5月31日)

前後はイベントを延期・中止したものの、それ以外の期間ではおおむね予定通りに実施しています。

小学生の社会科見学や出前授業、中学校の職場体験、高校生の受け入れなどは、町の方針や感染状況と照らし合わせて行っていますが、手指消毒や食事場所の確保などに注意して受け入れられています。先生と相談しながら、その都度コロナ対応を確認しつつ実施しています。

○情報発信

新型コロナが広まって以降、臨時休館、イベントの人数制限、行動様式の変容などが要因となり、来館者数は減り、気軽に来られる資料館を目指していた当館にとっても、感染防止の対策から来館に足踏みされるような状況となってしまいました。

そこで当館の取り組みとしては、アフターコロナを見据え、安心して来館できる環境作り、情報発信を積極的に行っていくことにしました。以前からあった当館HP内にあるブログで活動報告をするだけでなく、Facebookやインスタグラム、YouTubeなども活用して、幅広い層へ情報を発信し、資料館を知ってもらうための足掛かりとなるような取り組みを行っています。

インスタグラムでは、動画でイベントや展示の様子を紹介したり、館内だけではなく、近隣の施設や風景なども投稿したりして、町の情報も一緒に伝える役割も持たせています。また、YouTubeを使って、町の伝承を基にした紙芝居の動画を作成して公開しています。こうした情報発信の取り組みは始めたばかりですが、郷土資料館の活動や瑞穂町を知ってもらうきっかけにしていきたいと考えています。



(写真)YouTube「古民家で楽しむ紙芝居」より

○現状と今後の展望

新型コロナ感染症が広まり一年以上が経過していますが、いまだに試行錯誤が続いているというのが現状です。入館者も臨時休館が重なった昨年と比べると戻りつつありますが、当面は安全を優先させるため、以前のような来館者数にはならないと思います。

今後、コロナ後も見据え、資料館の魅力を知ってもらう取り組みを行い、一人一人の来館者に満足してもらう努力を続けていく必要があるでしょう。

コロナ禍における新たな博物館活動～令和3年度活動報告～

清瀬市郷土博物館 古川 百香

はじめに～臨時休館、再び

令和3年度は全庁的な組織改正に伴い教育委員会から市長部局の企画部に移管となり、当館にとって新たなスタートを切った1年だった。これまで通り社会教育施設として博物館活動を継続していくことには変わりはないが、当館が市の歴史や文化を見て触れられる場であることから、シティプロモーションという視点に立った活動を展開していくことも今後求められるようになった。そこで改めて当館の基本構想や理念といった原点に立ち返りながらも、新しい活動を展開していこうというさなか、3回目の緊急事態宣言により4月28日～5月末まで再び臨時休館となった。

感染症対策の強化

約1か月の臨時休館の間に、今年度1本目にあたる特別展「文化勲章受章記念 澄川喜一展」（令和3年7月開催）の開幕にあわせ、文化庁の「文化施設の感染拡大予防・活動支援環境整備事業」の補助金（以下、文化庁補助金）を活用して、消毒液、温度検知カメラ、空気清浄機等を購入し、感染症対策の強化を図った。昨年度は職員やボランティアが事業開催時に来館者に対し各々検温や手指消毒の声掛けなどを実施していたが、これにより感染症対策にかかる労力の軽減化とともに、来館者の安全・安心を図ることができた。

コロナ禍における新たな博物館活動～インスタ、はじめました

以前より当館ではYouTubeチャンネルを開設しており、清瀬の歴史文化に関係する動画を配信していたが、コロナ禍及びシティプロモーションの観点からインターネットを活用した発信をより重視し、YouTube、Twitterに加え、4月からはInstagramを開設した(@museum_kiyose)。Instagramでは、展示や教育普及事業といったイベント告知や報告などを職員が日々SNSのイロハを学びながら更新している。元々の当館の来館者層がシニア寄りのためか「映え」要素が少ないのか、フォ

ロワー数の伸び率は難しいところだが、これまであまりご縁のなかった方に当館を知っていただける機会にもなるため、地道にPRを重ねていきたい。

また展示の予告動画や講演会の動画を配信するといった、これまで当館で取り組んでいなかった活動も始めた。一例を挙げると、特別展の記念講演会については、感染症対策による人数制限のため、会場内で聴講できない来館者に対し別室へ動画を配信して、リアルタイムで聴講ができるようにし、後日、録画・編集した動画をYouTubeで公開した。特別展関連の動画については、前述の「澄川喜一展」で予告動画2本・開催案内動画・記念講演会動画を、「走れ！清瀬鉄道物語展」（令和3年10月開催）では予告動画3本、開催案内動画・展示解説動画4本を当館YouTubeで公開中なので、是非ご覧いただきたい。なお、インターネット上のライブ配信については、テスト配信を行ってみたものの、館内のインターネット環境や資料の著作権の関係により、これからの課題となっている。

この配信にかかる機器の購入についても感染予防対策と同様、文化庁補助金を活用して揃えることができたが、これらの活動を実現することができたのは配信機器や動画編集に詳しい職員がいたことが大きかったように思う。



配信による記念講演会聴講の様子（令和3年7月22日）

おわりに

今年度はコロナについていろいろなことが分かってきたり、ワクチン接種が進んだりということもあり、昨年度と違って博物館も対策をより強化、あるいは一部制限を行った上で、事業を継続的に実施できるようになった。それでもコロナのことだけでなく、さまざまな理由で博物館へ足を運べない方がいることも事実だろう。これまで「博物館に来てもらう」「博物館で学んでもらう」ことが基本だった博物館活動だが、より多くの方に博物館に触れる機会を提供するためには、例えばSNSの活用など、「博物館から発信する」活動も今後の博物館に求められる視点ではないかと感じているところである。コロナの収束もまだ見えていない今、当館も駆け出しでまだまだ課題はあるが、「発信する博物館」をできるところから継続的に進めていくことができればと思う。



公式 Instagram



公式 YouTube

コロナ禍の状況と課題

檜原村郷土資料館 清水 達也

檜原村の感染状況

檜原村郷土資料館が設置されている檜原村では、12月1日時点の総人口は2,073人、村内感染者総数は12人と村内での蔓延はかろうじて防いでいる状態である。

ワクチン接種（2回目）は88%（12歳以上）の接種が完了しているとのこと。

令和3年度のコロナ禍の資料館状況について

令和2年3月20日時点では、4月1日より状況を見ながら段階的に館内人数規制などを緩和していく予定であったが、4月24日には25日から5月11日まで緊急事態宣言発出による臨時休館が決定し、最終的には6月1日まで臨時休館が続いた。

臨時休館中は館長代理のみ出勤しており、各種問い合わせへの対応や資料館に関する打ち合わせなどを行っていた。

6月2日より検温・消毒・マスク着用・換気などの基本的な対策から事前予約制や館内人数制限などを実施し、資料館を再開。7月2, 6, 7, 27, 28日及び8月3日にワクチン接種会場として資料館1階鑑賞室を使用したいとの要請があり、教育委員会と協議し、ワクチン接種会場の設置日は臨時休館とし、資料館利用者と接種者との接触を避けることとした。7月12日には緊急事態宣言が再度発出されたが、対策を実施して開館することは可能との判断から開館を継続。10月1日には感染者数の減少などもあり事前予約制を廃止し、10月25日には館内人数制限も状況を見ながら条件付きで廃止とし、基本的な感染防止対策である検温・消毒・マスクの着用・換気の実施をしながら通常時と同じ対応をすることとなった。

周知方法と換気の問題点

来館者への周知方法として、当館には独自のWEBサイトやSNSは無く、基本は檜原村HPや三博協ポータルサイトへの掲載・電話やメールでの対応・掲示場所への張り紙で行っている。

昨年度に引き続き、今年度も事前予約制を実施するので来館いただく方にわかるよう、張り紙の場所を玄関扉や駐車場の掲示板など通常時の掲示場所のほかに、階段の上り口や階段正面の壁面など雨が当たるため通常時は使用していない来館される方が目につきやすいと思われる場所に、ラミネート加工した張り紙を掲示した。しかし、来館された方にお話を聞く機会がありお伺いしたところ、資料館へいらっしゃる際にはWEBサイトなどは見ておらず、通りすがりに資料館の看板をみたので受付のある2階まで上がってこられたという方が大半で、予約制などの掲示物に関しては気づかなかった方もいた事から、来館者の目につきやすい新たな告知スペースやWEBサイトやSNSの利用などの改善が必要と考えてはいる。ただし、独自のWEBサイトやSNSなどに関しては運用する人材の不足や維持費等により現在のところ実施は難しい。

換気について、資料館の周辺にはBBQ場などがあり、夏のBBQシーズンや冬の薪ストーブなどにより煙とにおいが風向きにより資料館側に流れてくるため、窓を開ける際は煙やお

いなどを確認しながら換気を実施しなければならず、館内人数が多く換気が必要な時に煙があると実施しにくく、また玄関扉には網戸はなく虫の侵入防止対策が出来ないため開放できず、窓の数も少なく建物の片側であるため換気扇もつけて対応していた。また、冬場の換気は館内の室温と湿度も低くなり展示品への影響や受付前に検温と消毒用の機材を設置しているが、エアコンの吹き出し口の関係上受付周辺は室温が上がりやすく、体温計は周辺が10℃を下回ると体温が測れなくなってしまう問題があったため、開館直後や換気後は検温が出来ない状態となってしまうことがあり、ご来館いただいた方にお待ちいただくこともあった。

資料館の出来事

臨時休館の期間に、以前より紫外線などにより地図部分の色が薄くなりほぼわからなくなってしまっていた民話ブースのパネルを新しくするため、業者の方と打ち合わせを重ねた結果、5月14日に完成し設置した。

檜原村郷土資料館に収蔵されている「宇田薫家文書」が虫食などにより文書を広げての利用が困難な状態だったため、檜原村文化財アドバイザーをお願いしている国文学研究資料館の西村慎太郎氏より修復をしてはどうかのご提案をいただき、東洋美術学校様のご協力により現在20点の修復作業を実施している。

例年行っている特別展の昆虫展及びお祭り写真展は、WEBサイトへの掲載や掲示板の張り紙などの告知は昨年度に引き続き行わず、感染防止対策を実施しながら開催した。



民話パネル 修繕前



民話パネル 修繕後

コロナ禍の日野市郷土資料館

日野市郷土資料館 白川 未来

はじめに

日野市郷土資料館は、統合により使用されなくなった、旧高幡台小学校の校舎にある日野市立の郷土資料館です。同じ建物には、教育センター、公民館、学童クラブがあり、体育館やグラウンド開放も行われているため、資料館見学者以外の方も訪れる建物です。新型コロナウイルス感染症の拡大にともない、試行錯誤しながら安全対策を講じて活動を行ってきました。

令和3年度のコロナによる主な影響

新年度が始まり早速4月26日から5月31日まで臨時休館となりました。例年5月に開催していた、勝五郎生まれ変わり物語の講演会は中止としました。9月には、神社の祭礼時の文化財公開が中止となり、例年の現地案内イベントも形を変えて、講演会のみとなりました。実施に向けて調整をしていた学校団体見学2件と職場体験1件が学校側の決定により中止となりました。冬季には、「密」になりそうな事業として正月飾りづくり、どんど焼きは実施せず、記録と配信に方向転換しました。全体として「コロナのため中止」ではなく、今年度は「コロナのための実施方法の変更」をしてきました。

職場環境と職員体制

事務室では、ビニールシートを用いて手作りで机の間に透明スクリーンが張られています。平日も交代で勤務するため、全ての机に常駐はせず密にはなりません。昨年度は市をあげての在宅勤務とあわせての交代出勤を実施しましたが、今年度の臨時休館中は通常勤務でした。日野市としてはテレワークの制度や設備を整え在宅勤務を一部で実施しています。メールでの連絡報告が増え、本庁への出席すべき研修や説明会などでの人の移動は減少しました。

開館業務と感染予防

手指消毒やマスク着用については、協力のお願いを掲示し、検温機能つきのアルコール消毒の機器も設置しています。公民館利用者、資料館見学者ともに建物に入る時の受付がなく、来館者の自己管理に頼っている状況です。基本的に実施する対策は以下のようです。

- ・展示室入口に手指消毒用のアルコールを設置
(以前はインフルエンザなど注意の必要な季節のみ設置)
- ・マスク着用と手指消毒の協力のお願いを掲示
- ・展示ケースやスリッパなどを消毒
- ・展示室入口の扉は常時開く
- ・チラシや冊子見本の設置場所を集約

手指消毒剤がある入口近くに集約して設置する。

今年度工夫したのは、来館スタンプの代わりにシール配布を行ったことです。秋季に関東考古学スタンプラリーが開催され、当館も参加しました。1都6県の対象施設をめぐるスタンプラリーです。今年度は事務局の許可を得てスタンプではなくシールを配布することとしました。シールを、一枚一枚とりやすいようにアクリルの台に並べました。

行事の再開と動画の発信

今年度は対面での事業を開催するようになりました。開催に当たっては以下のように注意をはらっています。また、家族参加は椅子をまとめ、他人との間には距離を置くように椅子を配置して指定席としました。縄文土器体験では、一人一人にバケツを用意して土器を洗う作業を行いました。



縄文土器の体験での1人用のセット

- ・申込定員の少人数化
会場の広さに対して申込人数を少なくする
同じ内容を複数回実施する
- ・会場の環境を整える
窓換気や机や椅子の消毒
机・椅子の配置

情報発信の例では、藤蔵・勝五郎生まれ変わり記念日ではWeb講演会を実施しました。



勝五郎生まれ変わり物語探究調査団↑
ホームページからYouTubeへ

学校教育への対応

小学校の社会科見学対応には工夫を要しました。1クラスを1グループ10人程度に3分割して、縄文土器・自然・昔の道具の3コーナーをグループで入替りながら見学します。もう一方のクラスは体育館に待機しながら、「勝五郎生まれ変わり物語」のDVDを視聴する時間としました。3クラスの場合で、学校側の提案により3か所の見学場所を3クラスが回る方式で実施した例もあります。

出張授業でも密にならない対策を考えました。扱き箸での脱穀体験では割りばしを、縄文土器体験ではバケツとブラシを一人一人に配布しました。人数によって限界はありますが、児童・生徒のためのものを個別に用意することで体験を実施可能としました。

市民の声や反応から

「時間ができたので何か調べようと始めた」、「近いからでかかれる」、「家を整理したら古いものがでてきた」、などといった声を耳にすることがありました。外出自粛が、地域博物館に目がいく契機ともなっています。講座や体験学習会を再開するようになれば、申込状況は概ね順調でした。また、臨時休館にともない市民のボランティア活動は中止となり、活動再開時には喜びの声が聞かれました。市民の期待が感じられます。その期待に応え、資料館の活動が継続するように、安全対策に取り組む必要があります。

コロナ禍でのボランティアの活動とこれから

多摩六都科学館 原 朋子

2020年から続く活動休止

2020年2月末、日本で新型コロナウイルスの感染が広がり始めたことを受け、多摩六都科学館は多くの博物館・美術館と同じく感染防止のため閉館しました。この時から現在に至るまで、当館が閉館したのは2020年2月29日～5月31日と、2021年4月25日～5月31日の2回。それ以外の期間は、東京で非常事態宣言が発出された状態でも入館者数やイベント規模を調整して活動を続けていました。ただ科学館ボランティアの活動は、最初の休館に入る一週間前から現在に至るまで、ずっと休止のままです。

休止の理由は、当館のボランティアの主な活動が展示室の体験コーナーや週末の実験や観察のプログラムなど、来館者と対面でコミュニケーションをとる場面が多いからです。感染リスクが非常に高いこと、また高齢者やワクチン接種の順番が遅かった小中学生が多いことから、科学館の開館とは切り離して判断しました。

「今まで通り」ができない中での工夫

活動休止とはいえ、状況が良くなればいつでも再開できるよう、科学館としてはボランティアと常に連絡を取りあい、交流を続けることを意識しました。2か月毎に発行する科学館ニュースの発行日に先がけてそれぞれの近況やみんなに伝えたいメッセージを募集し、それらをまとめたボランティア便りをニュースと共に全員に郵送しました。家族以外との交流に飢えていたところに届く馴染みのある人たちのメッセージはとても好評で、回を重ねる毎に虹や庭の野菜の花を撮った写真や新作のペーパークラフトなど、個々人の活動の様子も送られてくるようになりました。科学館からも館庭の様子や企画展の取り組みなどをレポートし、アナログな手紙でスピードは遅いものの、生の声が伝わる双方向のコミュニケーションが保たれました。



河野ゆきさん（左欄目録）
雪が降る中「お天気を知らせてくれて、お陰で僕も寒さ
に気づきやすくなりました。写真も添付します。
ありがとうございます。」
それにしては、あの日は大きかったですね。車のボンネットが
へこむかと驚きました。



五中廣さん（右欄目録）
私が撮っている畑で、美しい盛り
咲き、綺麗な花「お天気のよ
うに私がゆっくりする予定です。
この花と一緒に写真を送りたい
ものです。」



**栞君さん（右欄目録）作成のバスロ、ハノイの型を複製にした感想のしり。
（写真も添付します）

ボランティアメッセージの紙面

また、従来とは違う形の活動も始まりました。「活動休止といっても直接会わなければ大丈夫」との考えで、模型飛行機作りに取り組んでいるジュニアボランティアのグループから、活動をオンラインで続けたいと提案されました。こんな状況下でも行いたいという熱意を汲んで、科学館がZoomの環境を用意し、休止前と同じくくらいのペースで続けています。パソコンのカメラ越しという不自由な環境ながら、中高生が作った模型

飛行機を指導役の大人ボランティアがチェックして改良、というやりとりを重ねて、感染状況が落ち着いてきた2021年の秋、やっとメンバーが集まった時には試験飛行ができました。



模型飛行機のテスト飛行で久々の再開

他にも、休館以来休止していた展示室のクイズラリー端末の再稼働に向け、改良したシステムが正常に動くかどうかを確かめるモニター役や、ジュニアボランティアによる展示解説ポスターの作製など、来館者と直接コミュニケーションをとらない、今までとは違った形の活動に徐々に取り組んでいます。



クイズラリー端末の利用モニター

活動再開と、これからのこと

活動休止の間、「科学館に行かなくなったら生活リズムが崩れちゃった」、「毎週会っていた一人暮らしのメンバーが無事に過ごしているか不安だから連絡を取ってほしい」といった声が寄せられ、ボランティアにとって科学館が、活動の時間に限らず、それぞれの生活や交友関係の一部として根付いていることを再確認する機会にもなりました。

2021年12月、約2年ぶりに対面でのボランティアリーダーの会議が開かれました。対策を立てながら早く以前のような活動をしたいとの声が多く上がる反面、自身や家族がハイリスクな持病を抱えている人に配慮した慎重な意見もあり、単純な多数決では決められない難しさを痛感しています。

みんなが納得のいく再開のしかたが見えてくるまで、焦らずに十分に話し合いを重ねようというところで落ち着きましたが、単純にコロナ禍以前の活動スタイルに戻るのではなく、今できること・したいことに柔軟に向き合い、今までと違うやり方や居場所としての在り方も考えながら、進化したボランティア活動を科学館とボランティアとでつくっていきたいです。

640 日の臨時休館と博物館再開

東京農工大学科学博物館 齊藤 有里加

1 長かった臨時休館とデジタルでの発信

当館は2020年3月7日から2021年12月6日までの日数640日と長期に渡って臨時休館となった。その間デジタル活用への注力を行い、学芸員課程のオンライン実習や、資料のデジタル公開、cluster バーチャル製糸場展示空間を使った解説や、あつまれどうぶつの森を活用した「メタバース」での資料紹介と新領域へのチャレンジを行った。これらデジタル技術のノウハウを学生の教育へ還元したことは大きな収穫である。

一方で、当館がこれまで支援組織との連携の中で構築してきた科学コミュニケーション、機械動態展示、繊維関連の手仕事技術など無形の博物館資産の継承に大きな影響が出ている。2021年秋まで大学のレベル制限は1にならず、支援組織の活動が実施可能水準まで戻るのに時間がかかった。3支援組織が今やっと、博物館内に戻りつつあり、現在の状況を確認、新しい状況下でこれから何ができるかについて調整を始めたところである。



写真1 あつまれを活用したイベントの実施

2 「蚕糸学術資料」の調査

博物館5カ年計画の実施に伴い、デジタル化とともに収蔵庫内の蚕糸学術資料類の調査を進めている。現在、模型資料・掛図類の教材関係を中心に調査を行っており、中央教育研究機関として蚕糸学の発信にどのように役立てられたのかについて明らかにしたいと考えている。

3 オンライン活用等、新たな教育手法に注力した学芸員実習

今年の博物館活動の中で、最も充実した取り組みが行えたのは「博物館実習」である。農工大の学芸員課程における館園実習を含む3単位の通年実習であるが、前期を「オンラインイベントの企画」後期を「デジタルアーカイブ」をテーマに実施した。前期は博物館の動態展示の継承を意識して、和製紡績機「ガラ紡」を対象にその歴史、機械機構の理解、メンテナンス、解説活動を調査、体験し、自らオンライン企画としてまとめることで、繊維技術研究会の実施内容の継承は可能かどうか学生内でディスカッションを行なった。後期はオンライン開催の「デジタルアーカイブ学会」に参加し先端の研究課題に触れるとともに、デジタル技術の利点と課題について考察し、横断型ポータル「ジャパンサーチ」のワーク機能を活用し各個人でのウェブ企画展を制作した。さらに昨年実施したモバイルアプリケーションを活用した生物探索「バイオブリッツ」については他館

の協力を得て遠隔での生物探索と比較を楽しんだ。これらの実習の一部は現在博物館内においてコーナー展示を行なっている。また、昨年からウェブ展示として公開をおこなっていた勸工寮製糸場3D復元プロジェクト展の模型や図面類を公開している。博物館が学生たちと作り上げた成果をぜひ見てほしい。



写真2 学芸員実習における資料撮影実習

4 動態展示継承プロジェクトの開始

長年当館で実施してきた動態展示においても、その継承について再考の時期が来ている。当館の動体展示実施者は開発担当のエンジニアも含まれ展示資料に付随する貴重な情報を多く持っている。仮に新たな担い手が現れたとして、作業には多くの「暗黙知」が含まれ、機械の作動がこれまでのように継承できるとは限らない。メンテナンス技術、開発当事者による解説の記録化など当事者がいなくなった場合の記録化の並行が必要であることを再確認した。博物館機械資料を動かしながら残す上での課題抽出と、継承実験、記録化などを今後進めていきたいと考えている。



写真3 動態展示担当者との打ち合わせ

5 終わりに

博物館職員一同、博物館再開にホッと胸を撫で下ろしております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

コロナ禍における「くらやみ祭」出前・オンライン授業

府中市郷土の森博物館 佐藤 智敬

武蔵府中くらやみ祭 4月30日から5月6日まで、府中市の中心部に鎮座する大國魂神社を中心に行われる祭礼が「くらやみ祭」である。武蔵国府の例大祭にルーツがあるといわれ、単に神社祭礼というだけでなく、神社以外にも太鼓、山車等それぞれの担い手があり、さらに町内会等さまざまな協力のもと成り立っている、市を代表する大規模な行事である。

当館の常設展示のなかで、柱となるテーマのひとつが、この「くらやみ祭」である。神輿や太鼓などの実物資料とともに、ダイジェスト映像を鑑賞するコーナーを設けている。学習指導要領改訂に伴い、令和2年度に発行された小学4年生社会科の教科書、そして東京都の副読本でこの「くらやみ祭」が大きくとりあげられた。これを受け、当館ではワークシートを製作しHPにアップしたり、祭礼動画DVDの貸出の準備をしたりする等、くらやみ祭を教材として学習利用してもらう準備をすすめてきた。しかし、令和2年から3年にかけて、コロナ禍が府中を襲い、感染予防を目的として博物館の団体利用が少なくなる事態となってしまった。それだけでなく、令和3年度の春から夏にかけても緊急事態宣言に伴う休館、イベントの自粛という壁に直面していた。

教員のための博物館の日 そのさなか、実施したのが「教員のための博物館の日」である。国立科学博物館主導で実施されているこの事業に当館が参画したのは令和元年度からである（2年度は中止）。教員を対象として博物館の利用促進を意図し、博物館と教員間の情報交換の場でもある。当館では夏休み期間中の平日を実施日としていた。当年度は夏休み期間中の教員向けの研修会としての側面はもちろんだが、コロナ禍の中での学校利用の手段、そして「くらやみ祭」を教材に活かす手段とともに考えることを目的に、あえて実施したのである。感染対策として100人収容可能な会場で先着定員30人定員とし、ありがたいことに満員となった。

当日は学校向け学習プランや資料貸出キットなどを紹介するとともに、「くらやみ祭」に関する学習プランが用意されていることをアピールする意味で基調講演「お祭を教材に活かす」（講師：小野一之）を実施した。そして学習利用案内として「くらやみ祭」が教材として有効である、と紹介していった。

教員との情報交換のなかで、コロナ禍における校外学習の困難さ、教材としての博物館活用の困難さ等についても理解した。その中で「来館の上教材として利用したいものはあるが時間を作るのが困難」「博物館側が市外の学校にも来て出前授業をしてくれたらありがたい」といった意見も頂戴した。

また、小中学校としてもコロナ対策としてオンラインでの授業を実施できる体制が整いつつあること、Zoom等のオンライン会議システムを利用することで遠隔地とつながることも可能な状況になっている学校が多いことを知った。そして「児童生徒が学校にいる環境でオンライン授業をしてくれないか」という声があがった。そのため府中市内の話題にかかわるものであるなら、当館としても可能な限り出前授業のほか、オンライン

授業を検討したい、という結論になった。

出前、オンライン授業の実施 すると翌月、23区内から参加のあった小学校より早速「くらやみ祭」に関するオンライン授業の依頼があった。そして10月、Zoomを用いたはじめてのオンライン授業を博物館からの発信で実施することになったのである。

それに前後して、市内外の小学校から出前授業、オンライン授業の問い合わせも相次いだ。結果、10～12月までの間に市内外を問わず3校に出前授業、3校にオンライン授業を実施した。いずれも「くらやみ祭」を題材とした授業であった。「くらやみ祭」に関する依頼は、「むかしのくらし」を中心とした来館利用が大半だった中（これ自体が減ることもなく、来館の上での解説予約も増えている）、ほとんど実績はなかった。その他、遠足とともにくらやみ祭の映像解説希望、映像DVDの貸出希望も増えており、おもに小学生向けの新たなニーズが発生したことを実感している。

リモート活用の今後 来館を伴わない博物館利用は、たとえコロナ禍がなかったとしても検討すべき課題だったが、今回教員との対話の中、コロナ対応の過程で一手段として具体化した。もちろん当館としては来館の上実際に顔をあわせ、実物資料を見た上で様々なことを理解してほしいという希望は変わらない。出前やオンラインで伝えきれないことも多いだろう。しかしこれらの利用に関しては、博物館の存在自体を知ってもらうきっかけがもう一つできたのだととらえている。「くらやみ祭」に限らず、博物館紹介や園内解説等、出前やオンラインで知ってもらった上で「博物館に改めて来てみたい」と思ってもらうきっかけは、コロナの有無にかかわらず有効なものにとらえ、今後も模索していきたい。

※なお、教員のための博物館の日で実施した基調講演「お祭を教材に活かす」は、その後再編集し、現在もスライドショーを伴う字幕付き動画をYouTubeで公開中である。



8月18日実施「教員のための博物館の日」基調講演の様子
(手前に写るのは紹介用資料貸出キットの一部)

続・休館と新型コロナウイルス

パルテノン多摩 橋場 万里子・仙仁 径

パルテノン多摩は令和3年度も大規模改修のため休館中だったが、前年度同様、一部講座事業（古文書講座・市民学芸員定例会・植物観察会）をオンライン等を用いて実施した。前年度からの変更部分もあるので、その状況を報告したい。

■人文系事業での新型コロナ対応

古文書講座（初級・中級コース／各4回）と市民学芸員による定例会（月1回）は、前年度同様オンライン併用を継続した。

前年度から変更した点は、① Web 会議システム、② 講師による板書の方法の2点である。まず① Web 会議システムは前年度の Microsoft Teams から Zoom に変更した。特に古文書講座では、講演会に特化した「Zoom ウェビナー」というサービスを使用した。この変更により、前年度よりも見やすく、安定的な講座運営をおこなうことができるようになった。なお、リアルタイムで受信できなかったお客様用の期間限定での動画配信も、Zoom のシステム内でパスワード付きの動画配信と閲覧管理ができ簡便かつ安定化した。

また、②板書の方法も変更した。前年度は講座中に講師が板書する姿を撮影・配信したが、画面の切り替えのタイミングや見やすさなどについて苦情・要望があったため、今年度は講師が PC 上でタブレットペンを用いて記載する方法に変更した。これによりカメラと PC の切り替えをしなくても良くなり、画面上で完結する講座とすることができ、よりスムーズになった。こうした変更の結果、古文書講座（初級&中級合計）の参加者数は令和2年度の133名から186名に増加し、満足度（「大変満足」「やや満足」）は98%となった。また、新型コロナ終息後もオンラインを継続してほしいという意見も90%を超えた。

職員の労務量も前年度よりは減少した。職員は、オンライン初心者の方向けの通信テストの実施、毎回の講座の URL、アンケート案内、動画 URL の送信などを実施するが、メールのいくつかは Zoom による自動送信をおこなった。また、動画配信もクラウド上の記録をそのまま配信できるようになったため、前年度のように個人名削除などの編集作業やアップロードの手間がなくなった。対面のみ講座に比較すればまだまだ労務量は多いが、システムの適切な運用でさらなる負担軽減は可能と思われる。一方経費に関しては、ウェビナー等のサービス導入により、前年度よりも高額になった。参加者増により相殺できた点もあるが、オンライン講座は経費や労務量との兼ね合いが課題となることは確かであろう。

オンライン併用講座を2年間にわたりおこなってみたが、感染状況に左右されない継続的な事業実施にとどまらず、特に古文書に関してはオンライン形式そのものが大変好評で、従来の大教室における大規模講座の問題点（大教室でスクリーンが見えない、声が聞こえにくい、隣の人と密集する、病気の方や遠方の方は参加できない、トイレに気軽に行けない等）を克服するひとつの可能性を示すものになった。対面講座の意義は不変

だが、オンラインには新たな可能性があり、一度便利になったものを後戻りさせることは難しい。単に新型コロナへの対応にとどまらず、今後もオンライン講座は発展する余地があると考えている。

■自然系事業での新型コロナ対応

当館では自然系事業として、植物観察会（みんなの植物観察会、植物観察会ステップアップコース）、植物標本整理ボランティアを実施してきたが、昨年度から施設の大規模改修に入ったため、今年度も植物観察会のみ実施した。

今年度当初の計画では、みんなの植物観察会（以下みんな植）の野外観察は年4回、植物観察会ステップアップコース（以下ステップアップ）は資料配布を年4回予定していた。4月のみんな植とステップアップは予定通り実施することができたが、第4波によって東京都などに4月25日から緊急事態宣言が発出されたことにより、5月に予定していたみんな植は中止、ステップアップの資料配布は延期し、7月に配布した。また、中止したみんな植に代わり、学芸員が予定コースを歩いて植物を撮影し、写真と解説で家でも植物を観察できるポスター「ここで植物観察」を作成し、掲示・配布した。

ステップアップは昨年度から詳細な植物観察用の資料を配布し、希望者には講師による解説動画を公開している。自分の都合で歩くことができることや、詳細な資料をもとに観察できることが一部の受講生から高く評価された。一方、昨年度と今年度の新規受講生は、講師も他の受講生の顔も知らず一人で植物観察をしなければならないことを懸念していた。そこで、講師と新規受講生、そして新規受講生同士をつなぐことを目的に「新規受講生のつどい」を新たに実施した。

9月もみんな植とステップアップを実施する予定であったが、今度は第5波を受けた緊急事態宣言発出により、みんな植は中止、ステップアップは延期した。ところで、みんな植については9月の回より受付方法を変更した。従前は電話、申込フォーム、電子メールで先着順に受け付けていたが、受付開始とともに電話が殺到し、電話がつながりにくくなってしまふほか、複数の手段で先着順を決めるのに手間がかかることなどから、抽選制に変更し、申込フォームと往復はがきで受け付けるようにした。秋になってようやく感染状況が落ち着き、10月にみんな植を1回、ステップアップの資料配布を2回実施し、無事に今年度の植物観察会を終了することができた。

この2年間、新型コロナ対策をしながら植物観察会を実施してきて、受講生の中にも野外でみんなと講師の解説を聞きたい、という人もいれば、自分の都合に合わせてのんびり植物を観察したい人もいることが分かった。新型コロナに翻弄され続けてきたが、対策を試行錯誤する中で、より良い植物観察会運営につなげていく手ごたえを感じることができたのは不幸中の幸いであったかもしれない。

コロナ禍における活動

東京都立埋蔵文化財調査センター 塚田 清啓

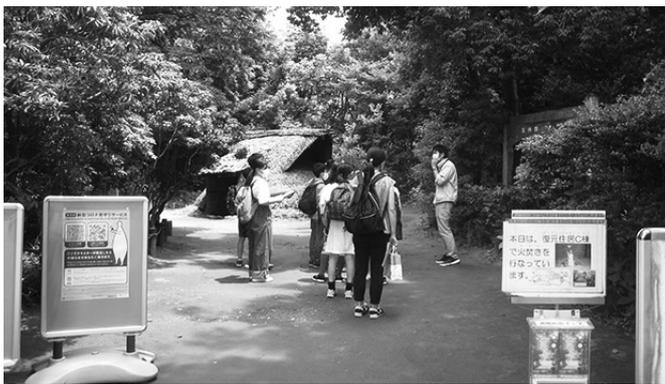
当センターにおいて、長い休館措置からようやく出口が見えたのは令和3年5月12日でした。コロナは昨年度に続き、ほぼすべての年間行事に影響を与えることとなりましたが、昨年度の取り組みから得られた経験を基に、コロナと向き合いながら活動を行いました。本号では今年度取り組んだ主な活動状況について報告します。

一般見学

令和3年度企画展示「現場のミカタ」は、臨時休館中の令和3年3月22日にオープンすることとなりました。常設展示とともに、当初はもちろん誰も見学できない状況ではありましたが、再開後は館入り口の受付にてマスクの着用を確認し、アルコール消毒にご協力いただいたうえで見学していただきました。

学校見学

昨年と同様に、密を避けるため1回の受け入れ人数を制限したうえで、さらに小グループに分割し、展示室、体験コーナー、庭園を巡回することでグループ同士が込み合わないよう工夫しました。職員による解説の際には、ポータブル式拡声器を用いて飛沫防止対策を行いました。コロナ以前の例年と比べると実施校数はまだまだ及びませんでしたが、昨年度より多く受け入れを行いました。小学校では学外行事が軒並み中止となっていたようで、規制緩和後最初の行事が当センターの見学であった小学校も多く、会話を我慢しながらも見学を楽しむ子供たちの様子は印象的でした。



人数制限した学校見学

また、5月中旬以降各所が活動を再開しつつありましたが、中にはやはり外部施設の利用が難しいとの声もありました。そのような状況に対応すべく実施したものにリモート見学がありました。Zoomなどのミーティングアプリを活用し、職員はセンターにしながらタブレットを用い、展示室や庭園内を解説しながらリアルタイムで案内を行いました。画質にやや制限はあったものの、予想していたより難なく映像を配信することが



リモート見学（センター側配信状況）

でき、さらには展示資料などはタブレットの拡大機能により、細部を拡大して解説を行えるといったメリットも発見することができました。

イベント・講演会・映像上映会

昨年度から大きな課題であったのが、当センターの特色である考古学にまつわるものづくりイベントでした。しかしながら、密に配慮した人数制限と室内の換気を十分に行うなどの対策を行ったうえで、糸作り、トンボ玉作り、土器・土製品作り、勾玉・耳飾り作り、貝輪作りなど昨年度中止になっていたイベントを実施することができました。また、企画展示に関連する外部の講師を招いた講演会をはじめ、企画・常設展示解説会や考古学講座、映像上映会などおおよそのイベントを開催できるまでになりました。ただし、縄文食体験のようなマスクを外して行うようなイベントについては行うことができず、次年度以降も開催の見通しが今もなお立っていません。



感染対策を設けた親子行事

今後の展望

今もなお猛威を振るう新型コロナは、度々出現する変異株により予断を許さない状況が続いており、直接実物を見たり、体験型のイベントを通して文化財あるいは歴史を伝えていくことを重要視している博物館等関連施設に対して大きな影響を与え続けています。ただ、これまでの活動に加えて継続して実施していくものにWebの活用があります。当センターでも今年度新たに立ち上げた企画展示の特設サイトは、来館できない状況下でもセンターを利用できるものとして期待されます。今後もさらなる活動を研鑽していきたいと考えています。

気持ちを新たに再スタート

奥多摩水と緑のふれあい館 神山 正明

<長引く休館と営業再開>

水と緑のふれあい館は開設以来初の長期臨時休館を令和2年2月29日(土)より3か月間、12月23日より6か月間行いました。

現在もソーシャルディスタンスを保つことが困難な非公開ブースもある中での営業を行っており、感染症拡大防止のための入館時の非接触型検温、手指消毒の徹底は基より、館内でのクラスター感染が発生した場合お知らせする「コロナ見守りサービス」、各展示室の換気能力に合わせた入館者数の制限などの設定を行い、国と都が発信する判定の基準等に鑑み、水と緑のふれあい館独自の施設管理マニュアルに沿って、お客様の安全確保を最優先とする営業スタイルでの運営再開となりました。

<感染症予防対策>

多くの人を招き、たくさんの方に喜んでいただけるサービスの提供を心がけ東京都との協議を重ね、ハード・ソフト面について様々な感染症予防対策を講じてまいりました。

暑い夏にもマスク着用での入館にご協力いただき感謝するなか、どうしてもご理解いただけず入館をお断りすることもありました。

マスク着用・検温後に入館いただいても、館内のいたるところにこれまでとは違った、動線が設けられていたり、営業時間を短縮しての日々の館内消毒や、レストランの座席数の削減などの直接のサービス圧縮など、ご利用いただく皆様に大変申し訳なく感じておりました。

(館内入口の動線の仕分けと非接触型自動検温測定機)



<観光地特有のお客様の再来>

感染の縮小が伝えられるようになると、一度に多くのお客様からの問合せが入るようになり、特に都内小学校の生徒さんの移動教室や、水の学習のためダムに訪れる計画の相談が多く寄せられ、小グループでの分割入館をお願いするなどの対応をさせていただきました。毎年紅葉の美しい11月中旬がこの地に訪れる観光のお客様は年間を通じ最も多く、ドライブ、ハイキング、登山等の帰りにお越しいただく当館への来館者のピークとなり1日の入館者が3000人近くなると、館内のトイレや各コーナー、レストランで昼食を待つ人に列ができて、入館制限の目安となる1時間当たりの上限ぎりぎりとなる営業日もありました。

そのような中で感染のクラスターが発生しないようお客様への注意喚起はもとより、施設管理面においても換気設備の能力上限を超えないよう特に時間当たりの入館者数に注意を払っての営業が続きました。

館内が混雑するこの時期は、奥多摩駅へ通じる乗り合いバスも盛況でマスクをされたお客様の長いバス待ちの列が続き、帰りの車中も大変混雑します。

<諦めないで・・・>

地震、噴火、土砂災害など各種災害の発生に力を合わせて克服してきた我々に、次々と変異しながら忍び寄る新たな宿敵に対し決して諦めずに、その改善に向けて着実に前に進めていく努力の継続こそ、今試されているのではないのでしょうか。

水際対策を講じるも、着実に毎日増加している現状は避けて通れなく、今後も現状に合った対策が求められることと思います。

その対応に向けた設備機材の導入もさることながら、心身の健康維持こそがなにより大切ではないのでしょうか。

<休館期間が長かったので実現した展示替え>

水と緑のふれあい館は開設以来、小河内村の生活民具を中心とした展示を行って参りましたが、臨時休館の期間を活用して久しぶりの大規模な展示室のレイアウトの変更を行いました。各コーナーの仕切りを取り外し新たに生まれた空間に、人口の流出により奉納が出来なくなった地域の民俗芸能の衣装や用具の展示、昭和初期まで使用された消防用資機材の展示、町内全域で上演される民俗芸能の写真展示、写真に残るかつての暮らしの展示など、これまでと変わった内容を紹介できるよう工夫することで、これまでとは少し変わったコンセプトでの紹介が可能となりました。

お金をかけずに手作りの展示替えですが、係るスタッフの努力の成果をご覧いただけるとと思います。

辛く長く開館を待ち望んだ期間も、考え方を変えれば有効に活用できることもあり、前向きに進めることも可能かと思えます。

(昭和初期まで町内で使用されていた龍吐水、腕用ポンプ、半纏、刺子耐火服等の消防用資機材展示コーナーの新設)



<気持ちを新たに再スタート・・・>

感染拡大防止を図りながら少しずつ日常を取り戻し、人々が元気を取り戻すことが出来るよう、これからも文化財・郷土芸能の紹介など奥多摩のPRを通じて皆様に愛される施設づくりに取り組んで参ります。

(11月21日「こ組」のお囃子 (12月12日、日原白箸づくりで2年ぶりにイベント再開) りで体験イベントの再開)



旧日立航空機株式会社変電所の公開開始について

東大和市立郷土博物館 池田 昌司



空襲の傷跡が残る旧日立航空機株式会社変電所

1 はじめに

都立東大和南公園の一角に、戦争の傷跡を残す旧日立航空機株式会社変電所（以下「変電所」という。）が建っています。この建物は、昭和13年に軍需工場の重要な施設として建てられました。太平洋戦争末期の昭和20年、米軍から計3回の攻撃を受けましたが、今もなおその痕跡を残したまま現存する貴重な戦災建造物です。

東大和市では令和2年度から令和3年度にかけて、変電所の保存・改修工事を行い、8月の東京2020パラリンピック聖火リレーミニセレブレーションと同日に開催を予定していた「第17回平和市民のつどい」においてお披露目することで準備を進めてまいりました。

しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、これらのイベントは中止となり、公開が開始できたのは、10月下旬になってしまいました。

新聞やテレビなどのメディアにも取り上げていただいた影響もあり、公開日には多くの皆様にお越しいただいております。

2 保存・改修工事

平成5年まで稼働していた変電所は、平成7年に市の文化財に指定されました。また、平成7年には1度目の保存・改修工事を行いました。今回の2度目の保存・改修工事では、以下の点を中心に工事を行いました。

- ・耐震補強
- ・屋上防水改修
- ・外壁補修
- ・階段改修

内部にある階段を保護するため、既存の階段の上にガラス製の別の階段を設置しました。これにより、これまで安全上の理由で公開できなかった2階も見学できるようになりました。

これらの工事には、約1億3千万円の費用がかかりましたが、工事費の一部には日本全国の皆様から寄せられた変電所の保存等のためのふるさと納税による寄附金を活用させていただきましました。

ふるさと納税は、全国的に返礼品競争が加熱しているなか、変電所への寄附金の返礼品は『平和への熱い想い』です。物ではなく、心を共有する珍しい取組を行っております。この変電所へのふるさと納税は、今後も、変電所を未永く保存等するため、引き続き取り組んでいくこととしています。

3 公開に向けて

変電所の保存・改修工事は、令和3年7月に完了しました。新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言の発出により、当初予定した「第17回平和市民のつどい」でのお披露目はできませんでしたが、新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言が解除され、感染拡大が落ち着いた段階で直ちに公開を開始できるよう、公開に向けた準備を着実に進めました。

変電所の一般公開の開始が当初の予定より遅れたこともあり、内部展示や解説について、時間をかけて、より充実したものに仕上げていきました。

4 内覧会を開催・そして一般公開へ

比較的感染が落ち着いた10月13日（水曜日）及び17日（日曜日）に、まず、変電所の保存等のためのふるさと納税でご寄附をいただいた方々に対する内覧会を開催しました。



内覧会当日は雨の中での開催でした。

10月20日（水曜日）から開始した一般公開は、毎週水曜日と日曜日の午前10時30分から午後4時まで行っています。

メディアで取り上げていただいた効果もあり、多い日には約500人を超える方々にお越しいただいております。

都立東大和南公園を訪れた方も多く立ち寄っていただいておりますが、学校の授業などの受入れも積極的に行っており、特に、授業で訪れた高校生にとっては、この工場で働いていた学徒勤労員と年齢が重なるため、実感を持っていただけているのではないかと思います。

また、実際にこの工場に働いていた方や戦争体験者の声が今までよりも多く寄せられており、今後は、そうした声を積極的に収集し、解説を充実させていきたいと考えております。

皆様のお越しをお待ちしております。

集合住宅歴史館のウィズコロナと移転計画

集合住宅歴史館（UR都市機構） 増重 雄治

はじめに

UR都市機構が運営する「集合住宅歴史館」（八王子市石川町）は、関東大震災復興のため建設された「同潤会代官山アパート」や戦後の住宅不足解消のため建設された「公団住宅」の昭和30年代団地の住戸内部を復元し、実際に再現住戸の中に入っ
てご見学頂けるのが特徴となっています。



旧公団蓮根団地ダイニングキッチン再現（1957年築）

（展示内容 同潤会アパート：代官山単身住戸・世帯住戸、公団住宅：蓮根団地2DK、多摩平団地テラスハウス、晴海団地高層アパート廊下階住戸・非廊下階住戸 計4地区・6間取り）

来館者の見学スタイルとしては、敷地内誘導、再現住戸等の解説及び展示物見張りのため来館者の自由見学は原則として行っておらず、事前予約制のうえ案内員同行でご見学いただく形をとっています。（常設展示のみ、平日午後のみ公開。）

感染症拡大局面からウィズコロナへ

新型コロナウイルス感染症の国内感染拡大に伴い、令和2年3月2日より臨時休館となり、古い住宅の決して広くはない間取りへの案内員同行での大人数の入室が3密を生ずることから、換気設備増設等それらへの対応を講じたうえで令和2年10月1日より公開を再開しましたが、令和3年度に入ってから感染者急増（第4波）と政府の第3回緊急事態宣言発出及びそれらを受けた東京都緊急事態措置等に伴う博物館等休業要請に従い、多くの公立博物館等と同様に当館も令和3年4月26日（月）より再び臨時休館となり、1ヶ月強の休館の後に都緊急事態措置の要請内容緩和を受けて6月1日（火）から再々公開となりました。

再開にあたっての感染防止対策は、昨年度再開時と同様に、

- ・来館者人数の限定。一日最大40名程度、団体により80名程度迄受け入れていたが、一日5名程度・団体により10名程度迄に限定（来館者連絡先は予約受付時に把握・記録）
- ・入館時の検温の実施 ・マスク着用義務付け
- ・消毒液設置、入館時の手指の消毒義務付け
- ・受付への飛沫防止アクリルボード設置
- ・書籍・資料等の閲覧の停止、当館関連以外の資料配布中止
- ・ガイダンス会場の定員減によるソーシャルディスタンス確保
- ・換気設備（換気扇・網戸）の増設、サーキュレーター等稼働
- ・来館者が歴史展示棟入館時に使用するスリッパの消毒などの対策を引き続き実施しているところです。

さて、コロナ前は年間2800名程度の来館があり、属性としては授業利用等学校関係がおおよそ3割、建設・不動産業関係が約1/4、中国他海外からの視察来館者が約1/4などとなっていました。感染拡大・再開後は予約定員を大幅に減らしたため、現時点では1ヶ月あたり100名程度の来館となっています。

ただし、建設・不動産業等企業関係の来館は回復が鈍い一方、秋以降の感染の落ち着きと新型株感染再拡大への懸念から学校等の駆け込み予約が増え、来館実績としては以前と同様に学校関係利用が3割程度となる見通しであり、次項で記す理由により報道・出版関係の取材依頼も増えつつあります。

閉館と移転に向けて

当館は北八王子の住宅・都市整備公団総合研究所（当時）の片隅に平成10（1998）年に開設して以来、23年にわたり多くの皆様にご利用頂きましたが、JR赤羽駅より徒歩圏にある旧公団赤羽台団地のスターハウス・板状住棟計4棟が住宅団地建築としては初の登録有形文化財となり、それらの建つ敷地一角の活用も期待されたことから、集合住宅歴史展示棟を赤羽台に移転のうえ令和5年春（予定）公開を目途にURの新たな（仮称）情報発信施設を開設する運びとなり、来年度以降の移転作業本格化のため令和3年度末で一旦閉館することとなりました。

赤羽台新施設へご来館の皆様には隣接する実際の新旧団地外観を見比べて頂きながらも、施設内展示で都市の暮らしの変遷を今以上に広く分かり易くお伝えすることが日本の集合住宅の生活文化を牽引した公団改めURの使命かと考えております。

これまで当館運営及び弊社業務に多大なるご高配を賜りました三博協会各館・各公共団体ご関係の皆様には深く御礼申し上げますとともに、新たな（仮称）情報発信施設の開館の暁には引き続きご協力・ご愛顧の程よろしくお願いたします。



登録有形文化財 旧公団赤羽台団地ポイント型住棟（スターハウス）



赤羽台に令和5年春移転予定の（仮称）情報発信施設外観イメージ

2021年度の活動を振り返って

くにたち郷土文化館 安齋 順子

はじめに

2021年度、東京都では新型コロナウイルスの感染防止措置として4/12(月)～4/24(土)にまん延防止措置、4/25(日)～6/20(日)に緊急事態宣言、引き続き6/21(月)～7/11(日)まん延防止措置、7/12(月)～9/30(木)に緊急事態宣言というように立て続けに重点措置が発出されました。くにたち郷土文化館では、昨年(2020年)度に初めての緊急事態宣言が発出した際は、要請により休館し、春の展示が中止となるような状況となりました。しかしそれ以降は、休館にすることなどもなく、来館者にマスク着用や手指消毒などの呼びかけを行いながら、開館を続けています。

当館の2021年度実施の企画展は以下のとおりです。

「関頤亭一人生、飄々と。」5/1(土)～6/13(日)

「甲野勇 くにたちに来た考古学者」7/22(木)～9/12(日)

「人間国宝 三浦小平二 旅と共に」10/9(土)～11/21(日)

「むかしの暮らし展」1/14(金)～3/13(日)

この他に、国立駅前に復元された旧国立駅舎の広間でのパネル展「円形公園はじまり物語」10/19(火)～10/25(月)を実施しました。

展示では、昨年に比べ、近隣の方を中心に緊急事態宣言や、まん延防止措置の中でも人出が少し戻ってきたように感じました。企画によっては遠方から来館者が訪れる展示もありますが、2021年度前半はコロナの広がりもあり、遠方の方は来館を控えたという方も多少いらしたようです。また、団体での来館も減少傾向にありましたが、この秋頃から10～20人程度の団体が来館される頻度も多くなってきているように感じています。

オンラインの活用

甲野勇展の関連講演会では講師が遠方にお住まいのため、事前に講師が東京に滞在されている時にインタビューを収録し放映する、オンラインを中心とした講演を行いました(オンラインを使えない方は、館内で視聴)。このオンラインでの講演会は当館では初の試みとなりました。



甲野勇展関連講演会の様子

また、これまで事業の受付は、電話にて先着順で受け付けることが多かったのですが、昨年度はコロナ禍において人数を絞った募集になる事業が増えたこともあり、すぐに定員に達してしまう事業が出てきたことから、メールフォームなどを活用しつつ、抽選での受付も行うようになりました。

関連団体活動休止と再開

当館では、長年、古民家での年中行事体験や、わら細工教室などを市民グループ「くにたちの暮らしを記録する会」(以下、記録する会)を講師として実施してきました。



WEBコンテンツ「おうちで郷土文化館」

しかし、2020年度はコロナ禍において、記録する会はメンバーが高齢であることや、会員自身が外へ出ることの不安を抱えているメンバーもいたため、参加者との密接が免れない事業は休止としました。一方で、2020年度の12月頃から記録する会のモチベーションを維持するためにも、少しずつ事業に関わってもらい、実施することも大切であると考え、「しめ縄飾り作り」・「繭玉だんご作り」など、参加者を募らずに会員だけで実施しました。製作物は展示し、製作過程はビデオで撮影し、HPで公開しました。

記録動画の作成などは、例年のように参加者を募り実施している状況ではなかなか難しいことでしたが、コロナ禍で変則的に事業を行っている中で、長年当館と共に活動している記録する会の活動をビデオで記録し公開する貴重な機会となりました。

また、毎年1月～3月頃に実施している小学校3年生を対象とした社会科の授業「民具案内」は、例年記録する会が案内役を務めていました。「民具案内」は、小学生が地域のお年寄りから昔の話を聞くということがひとつの醍醐味ともなっており、2020年度は、記録する会は参加しない形での実施となり、記録する会の会員と小学校側の双方より残念に思う意見が聞かれました。

2021年度の「民具案内」は、記録する会と、小学生が、それぞれ別の部屋に集まり、リモートにより記録する会が小学生へ、昔の暮らしについて話しをするプログラムを実施予定です。



民具案内 リモートの練習

おわりに

当館では、展示やイベントなど、時には形を変えながら、一部を除き実施していける状況にはなっていますが、先が予測できない状況に変わりはありません。今だから出来ること、今だけやらなければいけないことを考え、活動をしていきたいと思えます。

この記事を書いている2021年12月、東京都の新型コロナウイルスの感染者の報告も10月半ばから50人を切る日が続いており、このまま終息してくれればと願うばかりです。

2021 年度の活動について

町田市民文学館ことばらんど 神林 由貴子

<はじめに>

ウィズコロナ 2 年目となった 2021 年度、当館は開館 15 周年を迎えました。「つながり」をテーマに掲げて展覧会や教育普及事業をすすめようとした矢先の 4 月 23 日、政府は新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために緊急事態宣言を発出。また、東京都の緊急事態措置等により町田市の美術館・図書館等の施設は 4 月 15 日から 5 月 11 日まで休館となり、さらに 5 月 31 日まで延長となりました。これに伴い当館では、5 月 15 日から 7 月 11 日を会期としていた春季企画展を 6 月 1 日から開催することとし、会期を短縮して実施しました。その後は休館することはありませんでしたが、各々の事業実施にあたっては、感染拡大防止の措置をとり、来館者が安心して事業に参加できるよう努めています。

<ウィズコロナの取組>

■展示事業

・時間制事前予約チケットや AR の導入

春季企画展「ZARD/ 坂井泉水 心に響くことば展」は、当館の 15 周年と ZARD デビュー 30 周年の記念の年に合わせ開催しました。ZARD の歌詞に焦点をあてた初めての展覧会となる本展は、多くの来館者が予想されることから 3 密回避のための方策として、当館としては初めて時間制の事前予約チケットを導入しました。チケットは 1 時間半毎の入れ替え制とし、事前にローソンチケットで購入していただく形をとりました。それぞれの入館時間に合わせてスタッフを配置し、並んでいるお客様への対応にも配慮しました。

また、展示内容においても、滞留して密にならないよう、広い空間をとった展示構成とし、各自のスマートフォンで無料のアプリをダウンロードしていただくことで楽曲を楽しむ AR を導入するなど、来館者が安心して展示を楽しむような仕組みを取り入れました。

そのほか、来館者同士の交流が難しい状況を踏まえ、それぞれの想いを伝え合い、共感しあえるツールとしてメッセージカードを設置。750 通のメッセージが寄せられました。

・展覧会紹介動画の配信

上記の「ZARD/ 坂井泉水 心に響くことば展」では、来館できない遠方の方に向けて展覧会の内容をご紹介する動画を ZARD の所属事務所である株式会社ビーイングのご協力で作成。ZARD の情報を不定期で紹介する YouTube 番組「WEZARD TV」で公開し、これまでに 37,000 回を超える視聴数となっ

ています。また、会期中にいつでも参加できるイベントとして「ZARD 検定」を配布していましたが、その解答を同じく YouTube 番組「WEZARD TV」で公開しました。こちらも 42,000 回を超える視聴数となりました。

本展は会期を短縮せざるを得ない状況となりましたが、動画の配信を通じて来館者を大きく上回る方々にご覧いただくことができ、ZARD/ 坂井泉水の魅力の一端を伝えられたのではないかと思います。



ZARD 展 展示会場（上）と寄せられたメッセージ（下）



■教育普及事業

・コンクール事業及び出張授業の実施

教育普及事業では、2019 年度から若年層向けの事業の充実を目指し始めました。これを受けて本年度より市内在住・在学の小学生、中学生、高校生を対象とした創作コンクール「ことばらんどショートショートコンクール」を実施しました。

本事業に先駆けて、市内小中学校に出向いてショートショートの書き方講座を行ったところ、コロナの影響で行事が軒並み中止となるなか、ショートショート作家が直に指南する本講座は生徒にとって創作の楽しさを知る貴重な機会となったようでした。また、自宅で書き方を学べる動画も作成して YouTube で公開するとともに、学校の先生用には授業中のクロームブックでの活用を視野に入れグーグルドライブに格納しました。

初年度となる今回のコンクールでは、目標を上回る 939 編の応募がありました。文学館に来館しなくても文学の楽しさを知ることができる、本コンクールではそのような機会を提供できたのではないかと考えています。

<おわりに>

ウィズコロナにおける「つながり」には、どのような手法がふさわしいのか、今後も試行錯誤を重ね、人と人、過去と未来を「つなぐ」事業を実施し、「文学」や「ことば」を通じた「つながり」の拠点になっていきたいと思ひます。



ZARD 展ポスター

博物館の役割を果たしていくために

羽村市郷土博物館 枝野 孝彦

<はじめに>

2020年初頭から始まった国内におけるコロナ禍により、当館でも感染症対策として、臨時休館や体験学習会等の事業の中止を余儀なくされた。何もかもが手探り状態であった令和2年度であったが、当館独自のTwitterアカウントを開設し、事業の周知や展示資料の解説、当館周辺で見つけた動植物を写真付きで紹介するなど、新たなことに挑戦した年度でもあった。

令和3年度も、感染症対策を継続しての運営となった。そのような状況下で、生涯学習施設としての博物館の役割を果たすためにはどうすれば良いか、情報収集を重ねつつ、職員全員で試行錯誤をしてきた。以下に具体例を挙げて報告していきたい。

<体験学習会の再開>

体験学習会は、講師の周囲に参加者が集まらざるを得ない性質上、「3密」の状況が発生しやすいため、令和2年度はすべて中止していた。

令和3年度は、参加者の定員や時間を縮小して実施した。体験学習会に携わる職員は、フェイスシールド及び不織布マスクの着用を徹底し、参加者も非接触型体温計による検温と手指消毒、マスクの着用、体調不良時の参加取り止めに参加条件とした。室内で実施する体験学習会では、例年よりも会場内のスペースを広くとったり、会場の部屋を増やしたりすることで3密を避けるようにした。また、参加者が共通して触れる必要がある器具と手指用のアルコール消毒液をセットで配置し、体験の一連の流れの中に消毒の過程を組み込んだ。

<展示におけるハンズオンの採用>

特別展「土器ッと羽村—縄文時代のくらし—」（9月11日～12月19日）では、ハンズオンコーナーを設けた。これは、来館者に実物の土器片などに触れてもらい、その手触りや重さを直に感じることで得られる感動体験を狙いとしている。ハンズオンコーナーの感染症対策としては、手指用のアルコール消毒液をコーナーに配置した。コロナ禍におけるハンズオン展示ということで、来館者の反応がどのようなものになるか不安な面もあったが、土器片を手にとって眺める来館者の姿が多く見られ、消毒液もきちんと使用していただけており手ごたえが感じられる結果となった。

<小学校の社会科見学の受入れ>

当館の年間来館者数の中で多くの割合を占めるのが、玉川上水・玉川兄弟について学習中の都内小学校4年生の社会科見学の団体である。上半期は、緊急事態宣言の発出もあり、来館予約はほとんどなかったが、下半期に入ると例年を大幅に上回る見学予約が入るようになり、10月中旬から12月末にかけての期間は、平日の開館日はほぼ毎日、2校～4校の小学校の団体が来館するような状況となった。

感染症対策としては、見学開始前に非接触型体温計による検

温と手指消毒を実施している。検温・消毒の時間が見学時間をできるだけ圧迫しないよう、より効率的な実施方法について検討を重ね、工夫している。また、前年度から中止していた展示説明員（ボランティア）による展示説明を11月より再開した。再開にあたって、事前に学芸員による試験的な展示説明を複数回実施し、検温・消毒のタイミングや誘導などのオペレーションをパターン化して、それに基づいた指導を展示説明員に対して行った。現在も、より良い方法を模索しながら実施している。

<おわりに>

未だ終息が見えないコロナ禍であるが、他館においても事業の継続のために様々な取り組みを実施されており、参考とさせていただくことも多い。今後も、博物館としてより良いサービスが提供できるよう、課題の発見と改善に努めていきたい。



体験学習会「まゆから糸をひこう！」の会場



特別展「土器ッと羽村—縄文時代のくらし—」会場内のハンズオンコーナー

科学館のウィズコロナ

コニカミノルタサイエンスドーム（八王子市こども科学館） 森 融

令和2年3月の休館以降、当館の展示物は、ほとんどがハンズオン（手で触れる体験型の展示）であることから、日本博物館協会の業種別ガイドラインに基づき、全てを利用休止としており、同年7月からの開館後もプラネタリウムの投影と工作教室のみで運営してきました。

多くのお客様から「展示室の再開はいつですか？」と聞かれたり、知らないで来館される方も多し中、展示物が触れるものばかりであること、展示室を再開した場合に、展示物の細かいところまで消毒が行き届かないこと、当館の一番多い来館者層が未就学児や小学生で、この年代までワクチン接種が進まないことが、展示室再開に踏み切れない要因でした。

今年4月からは、例年受け入れていた、市内の小学校・中学校のプラネタリウム学習投影を再開することとして、事前に募集通知を出しましたが、申し込んできた学校はわずかでした。これは、例年措置してきたバス配車がなくなったことも理由のひとつでした。受け入れができない分、個人で見に来てもらえるようにと、昨年度に引き続き6月から土曜日に学習番組を投影しています。

一方で、平日の午前中の幼稚園・保育園からの団体見学の申し込みは多く、以前は複数園一緒に見てもらっていたために、希望するすべての園を受け入れていましたが、午前中に1団体のみの受け入れとしたため、3月まで、すべての日に予約が入り、その後も問い合わせが続き、お断りする状態でした。

6月には昨年度は開催できなかった浅川化石観察会を、屋外行事なので密にならないことから再開させました。浅川化石観察会は、2001年にハチオウジゾウ（ステゴドン象）化石が発掘された浅川の約230万年前の地層へ行き、メタセコイア（アケボノスギ）の化石などを観察するものです。以前までは当館集合で、館内のハチオウジゾウの化石（レプリカ）などを解説してから、みんなで歩いて浅川の河川敷へ向かったのですが、展示を利用中止にしているため、目的地により近い八王子市役所の正面玄関前に集合することとし、そこで解説してから現地へ向かいました。

現地では以前のようにメタセコイア化石やコハクなどを観察して、いつもここで遊んでいるというご家族は「230万年前だったとは！」とびっくりされていました。館内での解説ができないため、ゾウ化石や当時の想像図などは見てもらえませんが、集合場所が近くなったため、歩く距離が短くなったのは良い点でした。化石観察会は10月にも開催し、以前の通り年2回の開催となりました。

5月に宇宙航空研究開発機構（JAXA）の小惑星探査機「はやぶさ2」帰還カプセル展示の協力団体に応募し、7月に展示団体に決定されました。当館の展示日程は令和4年3月11日～15日です。

カプセル展示は9月から他の施設で始まっており、コロナ対策での臨時休館のため展示を中止された科学館もあり、苦労が伝わってきます。現在、他の施設の募集方法などを参考にさせていただきながら、展示や見学申し込みの詳細を詰めており、できるだけたくさんの方に見学していただけるようにと計画を立てています。また、展示の前後には、はやぶさ2のプラネタリウム番組も投影したいと考えています。

また、1月15日からはいよいよ定員制により展示室を再開することを決定しました。今まではプラネタリウムが予約制でしたが、入館を予約制に変更することとし、現在、受け入れ体制を整えているところです。

一方で12月に入って、3月～6月に当館を新型コロナウイルスのワクチン接種会場にする話が持ち上がりました。水曜、木曜の午後4時からと日曜丸一日、数カ月に渡って5歳～11歳のワクチンを接種するというので、日曜は休館にせざるを得ず、現在、様々調整中です。

ワクチン接種も行ってもらいたいし、プラネタリウムも投影したいところで、日程調整等に苦慮している状況です。

1月中旬から展示再開を予定していますが、引き続き感染対策を確実にを行い来館者に喜んでいただけるよう、工夫をしていきたいと考えています。



手前：カプセル用の広場は閉鎖して電子顕微鏡で撮影した花粉の写真展を開催 奥：照明を消して閉鎖した1階展示室



閉鎖した2階展示室

古民家園のコロナ対応

狛江市立古民家園（むいから民家園）

令和3年度の古民家園の運営は、昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの感染状況等に応じて感染拡大防止の対策を講じながら、施設を管理し、事業を実施する1年となりました。

まず、第3回緊急事態宣言の発出に伴い、4月26日から5月31日まで、臨時休園の措置をとり、その後、6月21日まで、園内の古民家（市指定文化財旧荒井家住宅主屋）への立入りを制限しました。その後も、園内での飲食を禁止するなど、感染拡大防止の措置をとり、9月30日に緊急事態宣言が解除されて以降、12月末現在まで平時と同じ条件で開園しています。入園者には、マスクの着用、手指の消毒をお願いするとともに、密閉・密集・密接を避けるように促しています。

施設の管理に当たっては、開園前と事業終了後に消毒を行うほか、適宜消毒作業を行っています。昨年度の記事でも触れましたが、継続した消毒液の散布が木造建築にどのような影響を与えるのか、気掛かりなところですが、今のところ影響は見られないので、今後も建物の状態を確認しながら、消毒を徹底して施設を開放していくこととなります。

教室等の各種事業については、当初の事業計画のとおりには進まず、緊急事態宣言下に古民家への立入りを制限していた期間には、実施を見合わせました。7月以降、子ども向けの体験教室から順次再開しましたが、昨年度の経験を生かし、施設管理上留意していることのほか、①実施回数を増やすことで1回当たりの募集人数（参加者数）を抑える、②密を避けるためできるだけ屋外にて実施する、③道具等の使い回しをしない、以上の3点に留意しつつ事業内容を調整し実施していきました。

事業内容の調整に当たり、例えば、能楽の体験教室は、数日に渡って実施していたものを1日に凝縮し、例年実施している形から変更しましたが、かえって参加しやすいとの意見もあり、変更が功を奏する形となりました。子どもたちが伝統芸能に触れる機会を提供するのであれば、シンプルな形で同一内容を複数回実施し、なるべく多くの子どもに体験してもらう方が良いとの考え方もあり、コロナの影響により事業の新たな方向が見えてくることもありました。

このほか、秋には「むいからお月見音楽会」と題し、十五夜のお月見に合わせて琴の演奏会を実施しました。琴の演奏は、市内唯一の都立高校で、全国高等学校総合文化祭（日本音楽部門）に出場実績のある狛江高等学校箏曲部に依頼し、古民家の座敷を舞台にして、夕暮れ時から月が昇り始めるころまで、演奏を披露していただきました。高校生のひたむきな姿と心を込めて演奏される琴の音色、秋風、虫の声、そして夜空に昇る満月が合わさり、情感豊かな演奏会になりました。

コロナ禍において、特にイベント型の事業の実施に当たっては、実施自体をためらうなど、消極的な思考になりがちですが、コロナ禍だからこそ、少しでも明るい気持ちになれる、前向きになれるといった、イベント型の事業がもたらすプラス効果も求められており、状況によっては積極的に取り組んでいくことも必要になる、この音楽会からはそんなことも考えさせられま

した。

緊急事態宣言解除以降の事業は、当初の事業計画に沿ったかたちで進めていますが、飲食を伴う事業については、依然として実施を見合わせています。古民家のかまどを活用し、伝統的な生活文化等を体験する事業については、当園ならではの事業であり、感染防止策を踏まえた実施の方策を検討しています。来年度は開園20周年に当たることもあり、古民家園ならではの事業を実施していくためには、コロナの終息を待つのではなく、コロナ禍においても実施できる最良の手立てを今後も模索していく必要があります。



能楽体験教室の様子

笛、小鼓、舞、そして能面体験など、1日に凝縮して実施しました。



むいからお月見音楽会の様子

園内の長屋門上には月が昇り（写真右）、琴の調べに耳を傾けながら月を眺める、情感豊かなお月見となりました。

新型コロナウイルス感染症対策と博物館事業

東村山ふるさと歴史館 松崎 睦彦

新型コロナウイルス感染症対策のはじまり

東村山ふるさと歴史館・八国山たいけんの里では、令和2年3月2日月曜日から、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から休館し、全事業が中止となりました。開催中であった、小学校社会科見学対応展示「なつかしい暮らしと道具たち」は急遽、展示期間を3月1日日曜日までとしました。全3回を予定していた、東村山考古学講演会「縄文時代の社会構造と精神世界」は、第2回精神世界の象徴「土偶」、第3回「装身具の発達と土偶祭祀からみた社会の複雑化」を中止しました。職員の勤務体系は急遽、在宅勤務が推奨され、職場の人数が制限されました。しかし、在宅勤務が急な措置であったため、当初は自宅から市のファイルサーバーにアクセスできず、メールやウェブサイトの管理ページにもアクセスできない状態であり、なおかつ文書の持ち帰りが禁止され、在宅で可能な仕事を職員それぞれが模索する状況でした。感染状況が1か月先、2か月先にどうなるか誰にも皆目見当がつかないので、春の節供人形の企画展は準備を進めました。結局は会期順延をポスター・チラシ等でお知らせ（順延のお知らせは、ポスターチラシの図案を鍾馗の人形に替えてコロナ退散の願いを込めました）した挙句に、感染状況がよくならなかったため、水泡に帰して中止となりました。

緊急事態宣言解除後の開館、そして再びの休館

緊急事態宣言が解除され、感染状況がいったん落ち着いてきたため、休館を6月2日火曜日までとし、6月3日から再開しました。ただし、感染対策を館内で行うことはこれまで未経験であったので、事前に、既に再開された近隣の博物館をめぐり、それぞれの良いところ、あるいは当館でも可能な方法を取り入れ、また、市内の公立学校や市役所本庁舎、公民館等も参考にしました。事業は6月中は中止とし、6月中から開催予定であった企画展「写真でふりかえる東村山の出来事」は7月4日からの開催に延期しました。

再開後は来館者と密になってしまう可能性のある事業（「歴史館夏まつり」等）をのぞき、展示やイベントを予定通り開催していきましたが、令和3年4月28日（水曜）から緊急事態宣言により再び休館、6月1日（火曜）まで続きました。春の企画展は会期を6月2日からに変更し、夏の展示を中止して夏いっぱい開催しました。春の展示は準備がほぼできかかっていたのに対し、夏の展示は準備前でしたので、夏を中止にして春をずらすことにしました。とは言え、春の展示は既にポスター・チラシ・看板等は出来上がっていたので、延期に伴う損失は軽微ではありませんでした。

新型コロナウイルス感染症の感染状況は誰にも予測ができないことであるので仕方のないことではありますが、宣言の発出にしる解除にしる、前週の週末に政府が発表し、その後市の理事者の会議で市としての方策が出されるという流れの連続で、現場はなかなかの混乱続きでした。一方で、コロナ禍前よりイベントの申し込みが増加する不思議な現象にも戸惑いました。

事業と感染症対策

入館者への体温測定、マスク着用、アルコール消毒をお願いすることはこの2年間変わりはないですが、各事業で例えば視聴覚室での講演では、部屋への入室時も検温を1年目はしていました。今年度は入口で検温され、消毒もされているとの前提（入口にある窓口の担当が入館時にそれを促します）で、省略



小学校社会科見学への対応



企画展の展示解説



街歩きイベントでの解説



遺跡公園見学イベントでの解説

おわりに

コロナ禍の不便を嘆くより、コロナによる館への影響、町・生活の変化、といったものを表す資料を収集・記録・保存していくことが、何よりこのコロナ禍を意味のあるものに変えるパラダイムシフトとなるのでは、と思います。今後もコロナがどうなるにせよ、そのように業務に励んでいきたいところです。

をするなど、1年間の経験をもっていくらかの変化はありました。また、それまでは3密を避けるためにイベント等の募集人員を半分減らしていましたが、令和3年12月より、その制限を解除しました。が、1月に再び制限となりました。

屋内の展示解説等においては、担当職員はマスクの他にフェイスガードを装着しています。解説に熱をおびてくるとフェイスガードが曇って前が見えなくなったり、時間を節約しようと早口になると息苦しくなったりもしましたが、曇らないタイプのフェイスガードを各自用意したり、マスク生活に慣れることで、今ではかつてほどの抵抗感はなくなりました。また、屋外でのイベントについては、マスクのみでの対応にしています。

青梅市郷土博物館 コロナ禍での令和3年度の取り組み

青梅市郷土博物館 高野 剛志

臨時休館で始まった令和3年度

青梅市郷土博物館は、国の緊急事態宣言の発出を受け、令和3年4月6日から6月1日まで臨時休館いたしました。前年度は、臨時休館に伴い、当初予定していた展覧会の日程を大幅に変更し開催することとなりましたが、本年度は、臨時休館した期間を除き、以下のとおり開催するとともに、現在のところ、開催予定も変更せずに済みそうです。

- ・「新収蔵品展2021」
会期：令和3年4月17日（土）～6月20日（日）
（4月6日～6月1日は臨時休館）
- ・青梅市市制施行70周年記念展「ゆめうめちゃんに行く時間旅行（タイムトラベル）～青梅市誕生のひみつ～」
会期：7月3日（土）～9月5日（日）
- ・企画展「青梅の金融史～あおしん創立100周年～」
会期：9月18日（土）～12月19日（日）
- ・企画展「青梅宿の文人・根岸典則～文芸サロンに集う人々～」
会期：令和4年1月8日（土）～4月3日（日）

感染予防への取り組み

開館を続けるにあたり、他館における感染対策の状況の情報収集や日博協の新型コロナウイルス感染拡大防止のためのガイドラインを参考に、館内の定期的な消毒や換気の強化、ソファの使用禁止などの取り組みを続けています。

団体見学に関しては、令和2年の後半より、小・中学校の児童・生徒による見学について、企画展示室で20人、常設展示室で30人を上限とした見学や、複数のグループに分け、上限人数を超えないようにするなど調整できる見学については可能な限り受け入れるようにしています。その結果、授業の一環として来館する小中学生の見学も徐々に増え、少しずつですが以前のよう学習の機会が提供できるようになりました。

展示での工夫

本年度、青梅市は市制施行70周年を迎えました。これを記念して当館では、青梅市市制施行70周年記念展「ゆめうめちゃんに行く時間旅行（タイムトラベル）～青梅市誕生のひみつ～」を開催いたしました。

「ゆめうめちゃん」とは、本市出身のタレント、篠原ともえさんがデザインした青梅市の公式キャラクターです。本展示では、この「ゆめうめちゃん」が、青梅市が町村合併により誕生する前までさかのぼり、各町村の行政に関する資料や写真パネルで当時の各町村の概況や、市政施行当時に開催された記念式典の様子を紹介するなど、その時代にタイムトラベルするという設定で企画を組み立てました。



ゆめうめちゃん画像

この展示の中で、新たな取り組みとして実施したのが、職員手作り動画による展示への導入でした。この動画は、ゆめうめちゃんが、青梅市の歴史を解説する約3分間の動画です。



動画放映の様子

本動画は、新型コロナウイルスの影響で来館者に対する展示解説が行えない状況下で、どのように来館者に展示内容への理解を深めていただくかを考え、作成しました。また、来館者から館内に少し音楽を流した方がよいのではとの意見もいただいていたため、動画に音楽もつけることとしました。

アンケートを実施したところ、実際に来館された方々には大変好評であったため、次の企画展「青梅の金融史～あおしん創立100周年～」においても動画を作成いたしました。

この企画展は、青梅市と包括連携協定を結び、さまざまな活動を展開する青梅信用金庫が、創立100年を迎えることをきっかけに企画したものです。展示内容は、青梅信用金庫をはじめ、市内の金融機関の歴史について、明治期から昭和初期にかけての各種資料等を通じて幅広く紹介するものでした。

本展示においても、日本の金融の成り立ちや金融機関の歴史や背景をわかりやすく動画にしました。この動画により、金融史という固いイメージの展示も、より分かりやすく、興味をもちやすいものにできたと考えています。

今後の取り組み

現在、新型コロナウイルスの感染状況は新たな変異株が発生し、まだまだ予断を許さない状況が続いています。

今後は、感染予防の徹底や規模の縮小などの対策を図りながら、ウィズコロナの心構えで、コロナ禍に至る前まで実施することができていた講座等を徐々に復活させ、アフターコロナを目指して着実に歩みを進めていきたいと考えています。

桑都日本遺産センター 八王子博物館のコロナ禍における開館

八王子市郷土資料館 加藤 典子

令和3年(2021)3月31日、八王子市郷土資料館の展示場は、53年の歴史に幕を下ろしました。約5年後には、八王子駅南口集いの拠点整備により「歴史・郷土ミュージアム」として生まれ変わります。それまでの間、八王子の長い歴史と都内で唯一認定された日本遺産をPRする場所として、「桑都日本遺産センター 八王子博物館(愛称・はちはく)」(以下「はちはく」という。)の展示場を運営することとなりました。(写真①)



写真① 館内入口

はちはくのオープン予定日は、4月29日でした。しかし、4月23日の緊急事態宣言発出に伴い、オープンは6月12日に延期となりました。配布予定だったチラシやポスターのオープン日の差替え作業に追われるとともに、緊急事態宣言下でオープンのPRを大々的に行うことが難しい面もあり、十分な広報ができない苦労がありました。

6月12日のオープンに向けては、公益財団法人日本博物館協会の「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」等を参考に、館内で対策を話し合い、「はちはくオープン時の開館対応まとめ」を作成し、館内のブースごとにコロナ対策を検討していきました。

はちはくは、約300㎡で、「導入ゾーン」「テーマ展示ゾーン」「企画展示ゾーン」「体験・交流ゾーン」にわかれています。導入ゾーンでは、「入館されるお客様へ御協力をお願い」を掲示し、マスク着用と咳エチケットや手指のアルコール消毒の協力、37.5℃以上の発熱のある方等の入館制限、ソーシャルディスタンスの確保等を要請しました。また、来館者同士の距離を確保するため、館内滞在者を30名に限定し、滞在数がわかるカウンターを用いて、内部の人数を確認しながら運営することとしました。展示ケースは、一日二回の清掃業者による消毒で対応するとともに、一か月に一度、すべてのケースに抗菌コーティング作業を実施することとしました。

運営において対応に苦慮したのは、体験・交流ゾーンです。はちはくの展示は、実際に体験してもらうことをコンセプトに企画しており、体験・交流ゾーンは施設の要でもありました。

しかし、緊急事態宣言下では、高機による機織り体験や、車人形体験、「八王子宿名所めぐり双六」といった接触を伴うコンテンツはすべて中止せざるを得ない状況でした。むかしの道具を実際に触ったりできることをコンセプトとしていた「た

みの部屋」の運営も、畳スペースの入場数を5名以内に制限するとともに、道具に直接触れないように、道具の使い方を記した解説シートを作成する等の対策をとりました。また、図書閲覧や歴史相談に対応するスペースも利用時間を30分以内(他に利用者がいない場合は60分まで延長可能)に制限するなど、本来は積極的に体験・交流することを目的としたコンテンツがすべて制限の対象となりました。そのため、郷土資料館で毎年実施していた体験型のイベントの多くが中止となりました。

一方、学校の社会科見学や総合的学習の時間については、学校が希望する場合は実施することとしました。コロナ禍で課外活動の場が失われていたこともあり、学校側の需要は大きく、利用者は想定を上回りました。4月23日発出の緊急事態宣言では小中学校が規制の対象とならなかったため、社会教育施設としての博物館ができることを考えるきっかけとなりました。

学校に対しては、実踏の際に館内を廻りながら当日のコロナ対策を説明します。学年の人数が多い学校に関しては、ラインパーテーションを設置して館内を二分割、又は三分割することで密状態とならないようにするなど分散見学を呼びかけています。また、むかしの道具を実際に触って見学する際には、アクリル板で区切られた特設コーナーを設けて、広い空間で見学してもらえるようにしました。そのほか、出張授業等の依頼も増えており、コロナ禍において博物館と学校教育の連携をどのようにすすめていくのかは大きな課題であるとともに、今後期待するところでもあります。子どもの教育の場が失われることのないように、最大限の配慮をしながら、来年度以降は体験イベント等の活動も徐々に増やしていく予定です。(写真②)

また、当館では、オープンに伴い「ミュージアム展示ガイドポケット学芸員」を導入しました。展示解説の多言語対応が導入の大きな理由でしたが、緊急事態宣言下でボランティアの活動をはじめとした展示解説の機会が制限されたため、これを補完するものとしても活用しています。スマートフォンにアプリをダウンロードすることで、展示解説の文章や学芸員による展示解説音声を聞くことができます。今後、展示替えやイベントに合わせて更新し、活用していくことを検討しています。

現在、緊急事態宣言とまん延防止等重点措置の解除により、体験学習やボランティア活動を再開しました。12月22日からは、「お正月あそび in はちはく」と題し、畳の上で遊ぶことをテーマにしたお正月あそびイベントを実施します。また、12月25日には、今年度初となるボランティアによる紙芝居の実演を行います。まだ予断を許さない状況ではありますが、人と人との交流の中でしか生まれないものを大切に、博物館を運営していくことができればと考えております。



写真② 学校見学の様子

鈴木遺跡資料館のウィズコロナ・アフターコロナ

小平市鈴木遺跡資料館 高田 賢治

はじめに

鈴木遺跡資料館は、これまでは入館無料、入館者数の上限も特になく、またパネル・キャプション等による展示解説文は極力少なくし、学芸員もしくは解説員が言葉で展示見学者に解説を行うスタイルでの運営であった。

しかし、新型コロナウイルスへの感染は、主に保菌者からの口腔飛沫が付着することによって生じ、特に免疫力が低下している人に感染すると重度の肺炎を引き起こし、その致死率はインフルエンザの倍の6%程度にもなり、著名な芸能人が幾人も死に至ったことは記憶に新しい。

このようにして、ウイルス感染による病状の重篤化危険性が判明すると、鈴木遺跡資料館では展示室に多数の見学者を入れることは「密閉」と「密集」、対面での解説は「密接」といった、都知事が示した感染拡大につながる「3密」状態を引き起こしてしまうため、これまでの資料館の運営形態では、開館の継続は不可能となってしまった。

一感染拡大を受け一

鈴木遺跡資料館では、感染拡大第1波の時点では、政府や都の集会施設の休館要請に基づき、即座に休館措置を取った。

休館期間は令和2年3月初めから、6月初めまで継続された。

一規制緩和後一

感染第1波が一旦収束し緊急事態宣言が解除され、都から条件付きで集会施設の再開について指針が示されたことを受け、当館も都の指針に基づいた入館利用条件を設定し、開館を再開した。具体的には以下のとおり。

- ・入館時にはマスクの着用、手指消毒をお願いする。
- ・受付には飛沫防止用のビニールシートを張り、受付職員も常時マスクを着用する（写真）。
- ・展示の解説は、職員による対面では行わず、展示見学者から質問があった場合のみ、受付で飛沫防止シート越しに対応する。
- ・展示見学者がいる際は、展示室の出入り口扉と通用扉を開放し、通気を確保する。
- ・展示見学者同士のソーシャルディスタンスを確保するため、展示室内に一度に同時入館できる人数の上限を、5人に制限する。なお、同時に6人以上の展示見学希望が生じた場合には、先着順に5名まで入館してもらい、6人目以降の見学希望者は、退場者が生じた時点で入れ替わり入館してもらおう。
- ・団体見学希望があった場合は、団体を5人ずつのグループに分けてもらい、1グループずつ交代で順次見学してもらおうよう協力を依頼する。
- ・見学者の退場後は、塩素系漂白剤でスリッパや展示ケースのガラス表面を消毒する。
- ・例年鈴木遺跡資料館で開催している「特別展」は、来館者の急増により展示室内での3密を招く恐れがあるため、中止する。
- ・例年鈴木遺跡資料館で開催している文化財体験講座「ナイフ形石器を作ろう！」は、講師と受講者間で対面形式でのやり取

りとなり密接となってしまうため、中止する。

なお、展示見学者や受付職員などに新型コロナウイルス感染が確認され、それに連動して濃厚接触者に対しクラスター感染が発生した際、感染者の足跡がたどれるよう、通常は行っていない入館希望者1人1人に入館受付簿を記入してもらうことも検討した。しかし、個人情報保護条例の規定によりコロナ対策を理由にして個人情報を取得することは行き過ぎではないのか、との庁内での意見もあり、調整には大幅な時間を要することが見込まれたため、こちらは実施を断念した。

一現在一

その後、感染拡大の波は4度起き、デルタ株による第5波では都内で一日5,000人以上もの感染拡大を引き起こした。しかし、その間政府や都からは博物館等の完全閉館要請はなかったため、鈴木遺跡資料館では引き続き、これまでの感染対策を行いながら開館を継続した。

そして第5波も収束し、東京都の一日の感染者が10～20人程度に落ちついた現在、集会施設の利用規制要請はほぼなくなった。ただし、今後も基本的な感染症対策は継続するよう政府や都から要請されているため、鈴木遺跡資料館は入館利用制限の実施を継続している。ただし、同時入館者数の上限規制は5名から10名に緩和した。

令和3年12月現在、これまでよりもさらに感染力が強いと予測されているオミクロン株が発生し、日本でも外国からの帰国者にその感染が確認され始めた。この新株に対する見通しは全く立っていない。当館に限らず、博物館は今後もしばらくはコロナウイルスとの共存と、基本的な感染症対策の継続、イベントなどの開催制限を余儀なくされるのではなかろうか。



資料館受付の感染症対策実施状況

コロナ禍での工夫と試行錯誤

日野市立新選組のふるさと歴史館 松下 尚

日野市立新選組のふるさと歴史館は、全国的に人気がある「新選組」を主に扱う博物館として、展示や各種イベントを実施してきた。令和2年に始まったコロナ禍は新選組のふるさと歴史館の活動に様々な制限をもたらしたが、令和2年6月以降、試行錯誤しながら活動を行っている。これまでのイベントの中には、ある程度「密」「接触」を前提としたものもあり、コロナ禍の長期化の中で、どのように変えていくかを模索してきた。

コロナ禍1年の試行錯誤

令和3年度を迎えるにあたっては、それまでは手持ち式の非接触型体温計で受付職員が一人一人計測していたが、順番待ちができることがあったこと、人と人との接触をさらに減少させることを目的に体温計を据置型でセルフ計測するタイプに変更した。また、集塵機能が優れた空気清浄機を受付に1台、展示室内に5台設置し、新年度に備えた。



受付前の体温計と空気清浄機

しかし、来館者に人気であった、

- ・土方歳三や新選組隊士の格好をして新選組屯所の背景の前で記念撮影をする、通称コスプレコーナー



一部コーナー再開の目途は立たない。

- ・天然理心流の木刀（レプリカ）を持って重さを体感したり通称道場コーナーの再開の目途は令和4年を迎えようとする現在でも立たない。

人気もあり、雑誌やTVで紹介されたこともあるので事前予約制にするなどの案はあるが、まだ具体的な計画にはなっていない。また、年度の変わり目に端を発した、いわゆる「第4波」では東京都からの休業要請を受けて4月末から5月いっぱいまで休館した。

再々開館と第5波

6月の緊急事態宣言明けに再開館した後は、

- ・一度に入館できる人数を原則30名に制限
- ・予約の無い団体入館はご遠慮いただく
- ・ガイド解説の休止

などで密を避けるように注意しながら第5波中を含めて開館を継続した。

一方で、長距離移動が憚られる時期でもあり、企画展解説パネルの一部をPDF化して館のウェブサイトに掲載し「行ってみたいが行かれない」層の要望に限定的ではあるが応えるようにした。

また、昨年来、人と人との接触機会を減少させるため、来館者向けのアンケートを休止していたが、来館者・新選組ファンのニーズを汲むことができないデメリットは大きく、夏休み中の企画展開催に際して、クリップ式の使い捨て鉛筆を用いて試験的にアンケートを実施した。

10月以降、感染者数の減少にともない緊急事態宣言の解除から各種制限の段階的な緩和にしたがって、

- ・予約無しでの団体受け入れ（15名程度まで）
- ・館内人数（館内全体で一律30人制限 → 館内が「密」になっていると感じられたら入館制限または空いているエリアに誘導するようにしている。概ね「第一展示室（大）：30人」「第一展示室（小）：15人」「第二展示室：15人」程度を「密の目安」としている）

などを緩和し、11月からはガイド解説も限定的に再開した。

全国的な題材を扱っていくために

「新選組」は京都を中心に全国で活動した組織であるため、その関連資料も全国に所在している。

また、新選組ファンは全国に存在し、年齢層も幅広い。

これまでは全国から関連資料を一堂に集めて公開するような特別展を開催していたが、職員を含む「人の移動」と「人との接触」を減らすため「館所蔵の史料」「近隣在住者・博物館などが所蔵する史料」で「過去の展示と極力被らない」展示を行うよう工夫している。

令和2年度は日野及びその周辺の農民剣術と農兵隊を扱った「日野の剣士たち」を、令和3年度はいわゆる甲陽鎮撫隊を扱った「甲陽鎮撫」を開催している。

東京都三多摩公立博物館協議会 会員名簿

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町 1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺・西武園線「東村山駅」西口下車徒歩 8 分
府中市郷土の森博物館	府中市南町 6-32	042-368-7921	京王線・JR 南武線「分倍河原駅」から京王バス「郷土の森総合体育館」行き、「郷土の森正門前」下車すぐ
町田市民文学館ことばらんど	町田市原町田 4-16-17	042-739-3420	小田急線「町田駅」東口から徒歩 12 分／JR 横濱線「町田駅」ターミナル口から徒歩 8 分
町田市立自由民権資料館	町田市野津田町 897	042-734-4508	小田急線「鶴川駅」5 番バス乗り場から「野津田車庫」行きまたは本町田経由「町田駅」行きで「綾部入口」下車／小田急線・JR 横濱線「町田駅」21 番バス乗り場から本町田経由「野津田車庫」行きまたは「鶴川駅」行きで「袋橋」下車
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町 1-684	0428-23-6859	JR 青梅線「青梅駅」下車徒歩 15 分
調布市郷土博物館	調布市小島町 3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩 4 分
瑞穂町郷土資料館 けやき館	西多摩郡瑞穂町大字 駒形富士山 316-5	042-568-0634	JR 八高線「箱根ヶ崎駅」下車徒歩 20 分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原 5	0428-86-2731	JR 青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市大字熊川 850-1	042-530-1120	JR 青梅線「牛浜駅」東口から徒歩 7 分
武蔵村山市立歴史民俗資料館・分館	武蔵村山市本町 5-21-1 分館：武蔵村山市大南 3-5-7	042-560-6620 分館：042-566-3977	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス「村山温泉かたくりの湯」下車徒歩 1 分／分館：西武拝島線・多摩モノレール「玉川上水駅」から武蔵村山市内循環バス「大南三丁目」下車徒歩 3 分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市 920-1	042-596-4069	JR 五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩 17 分
羽村市郷土博物館	羽村市羽 741	042-558-2561	JR 青梅線「羽村駅」西口から徒歩 20 分／JR 青梅線「羽村駅」東口からコミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸 2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口から徒歩 10 分／西武池袋線「清瀬駅」北口バス乗り場 1 番から西武バス「郷土博物館入口」下車徒歩 1 分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町 3-12-34	042-525-0860	JR 中央線「立川駅」南口から新道福島行き・富士見町操車場行きバス「団地西」下車徒歩 5 分／JR 中央線「立川駅」南口から立川駅北口行きバス「農業試験場前」下車徒歩 5 分／JR 青梅線「西立川駅」下車徒歩 20 分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村 3221	042-598-0880	JR 五日市線「武蔵五日市駅」から藤倉行きバス「郷土資料館」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保 550	042-592-0981	多摩モノレール・京王線「高幡不動駅」から百草団地方面バス「高幡台団地」下車徒歩 5 分／多摩モノレール「程久保」下車徒歩 7 分
日野市立新選組のふるさと歴史館	日野市神明 4-16-1	042-583-5100	JR 中央線「日野駅」から京王バス高幡不動駅行き「日野七小入口」下車徒歩 5 分／京王線・多摩都市モノレール「高幡不動駅」から京王バス日野駅行き「日野七小入口」下車徒歩 5 分
小金井市文化財センター	小金井市緑町 3-2-37	042-383-1198	JR 中央線「武蔵小金井駅」北口もしくは「東小金井駅」からコババス北東部循環⑬「小金井公園入口」下車徒歩 5 分
くにたち郷土文化館	国立市谷保 6231	042-576-0211	JR 南武線「矢川駅」下車徒歩 10 分、JR 中央線「国立駅」からバス「国立操車場」行きまたは「国立泉団地」行き「くにたち郷土文化館」下車すぐ
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋 1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」から西武バス「イオンモール」行きで「八幡神社」または都営バス「青梅車庫」行きで「八幡神社前」下車徒歩 2 分
バルテノン多摩	多摩市落合 2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩 5 分
東京農工大学科学博物館	小金井市中町 2-24-16	042-388-7163	JR 中央線「東小金井駅」南口から徒歩 9 分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町 3-7-1	042-388-3300	JR 中央線「武蔵小金井駅」北口 2・3 番バス乗り場から「小金井公園西口」下車徒歩 5 分／西武新宿線「花小金井駅」南口より徒歩 5 分「南花小金井」(小金井街道沿い)バス停から「武蔵小金井駅」行き「小金井公園西口」下車徒歩 5 分
たましん歴史・美術館	国立市中 1-9-52	042-574-1360	たましん歴史・美術館：JR 中央線「国立駅」南口前／たましん美術館：JR 中央線「立川駅」北口より徒歩約 6 分
東京都立埋蔵文化財調査センター	多摩市落合 1-14-2	042-373-5296	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩 5～7 分
集合住宅歴史館（独立行政法人 都市再生機構）	八王子市石川町 2683-3	042-644-3751	JR 八高線「北八王子駅」下車徒歩 10 分／JR 中央線「八王子駅」より大和田、東海大学病院経由津木台行き「ケンウッド前」下車徒歩 5 分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町 5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」北口から徒歩 18 分／西武新宿線「花小金井駅」「田無駅」からはなバス第 4 北ルート「多摩六都科学館」下車すぐ
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町 4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」南口から西武バス「久米川駅北口」行きで約 10 分／西武新宿線「久米川駅」北口から西武バス「清瀬駅南口」行きで約 20 分（いずれも「ハンセン病資料館」で下車）
コニカミノルタサイエンスドーム（八王子市こども科学館）	八王子市大横町 9-13	042-624-3311	JR 中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」から西東京バス「戸吹」・「みつい台」行き等「サイエンスドーム」下車徒歩 2 分
桑都日本遺産センター 八王子博物館	八王子市子安町 4-7-1（サザンスカイトワー八王子 3F）	042-622-8939	JR 中央線「八王子駅」南口から駅直結／京王線「京王八王子駅」から徒歩 8 分
東京都立大学 91 年館	八王子市南大沢 1-1	042-677-1111	京王相模原線「南大沢駅」下車徒歩約 5 分
狛江市立古民家園（むいから民家園）	狛江市元和泉 2-15-5	03-3489-8981	小田急線「狛江駅」和泉多摩川駅 から徒歩 10 分／小田急線「狛江駅」北口から「多摩川住宅」行きバスまたは「こまバス」（北回り）で「児童公園」バス停前
武蔵野市立 武蔵野ふるさと歴史館	武蔵野市境 5-15-5	0422-53-1811	JR 中央線・西武多摩川線「武蔵境駅」から徒歩 12 分／JR 中央線「武蔵境駅」北口からムーバス境西循環に乗車し、4 番「武蔵野ふるさと歴史館」下車すぐ
帝京大学総合博物館	八王子市大塚 359	042-678-3675	多摩モノレール「大塚・帝京大学駅」下車徒歩 15 分／京王線「聖蹟桜ヶ丘駅」高幡不動駅「多摩センター駅」から京王バス「帝京大学構内」行きに乗車し終点にて下車
国際基督教大学博物館 湯浅八郎記念館	三鷹市大沢 3-10-2	0422-33-3340	JR 中央線「三鷹駅」南口または「武蔵境駅」南口から小田急バス「国際基督教大学」行きにて終点下車／武蔵境駅からタクシーで 10 分
日本獣医生命科学大学付属 ワイルドライフ・ミュージアム	武蔵野市境南町 1-7-1	0422-31-4151	JR 中央線・西武多摩川線「武蔵境駅」南口から徒歩 2 分
小平市鈴木遺跡資料館	小平市鈴木町 1-487-1	042-323-2233	西武新宿線「小平駅」南口から西武バス武蔵小金井駅行き、もしくは JR 中央線「武蔵小金井駅」から西武バス小平駅南口行き「回田本通り」下車徒歩 5 分／西武新宿線「花小金井駅」から立川バス「国分寺駅北口」行き「共済住宅」下車徒歩 10 分

※集合住宅歴史館（独立行政法人 都市再生機構）は令和 4（2022）年 3 月 31 日をもって閉館し、北区赤羽台に移転のうえ、令和 5（2023）年春にオープンする予定です。今後の詳細については当該館の HP でご確認ください。

東京都三多摩公立博物館協議会会報
ミュージアム多摩 No.43

発行日 2022年3月31日

発行 東京都三多摩公立博物館協議会
2021年度会長 羽村市郷土博物館
羽村市羽7 4 1 042-558-2561

編集委員 集合住宅歴史館 増重 雄治
江戸東京たてももの園 阿部 由紀洋
たましん歴史・美術館 坂田 宏之
東京都立埋蔵文化財調査センター 塚田 清啓